

景観マネジメント的
ならガイド

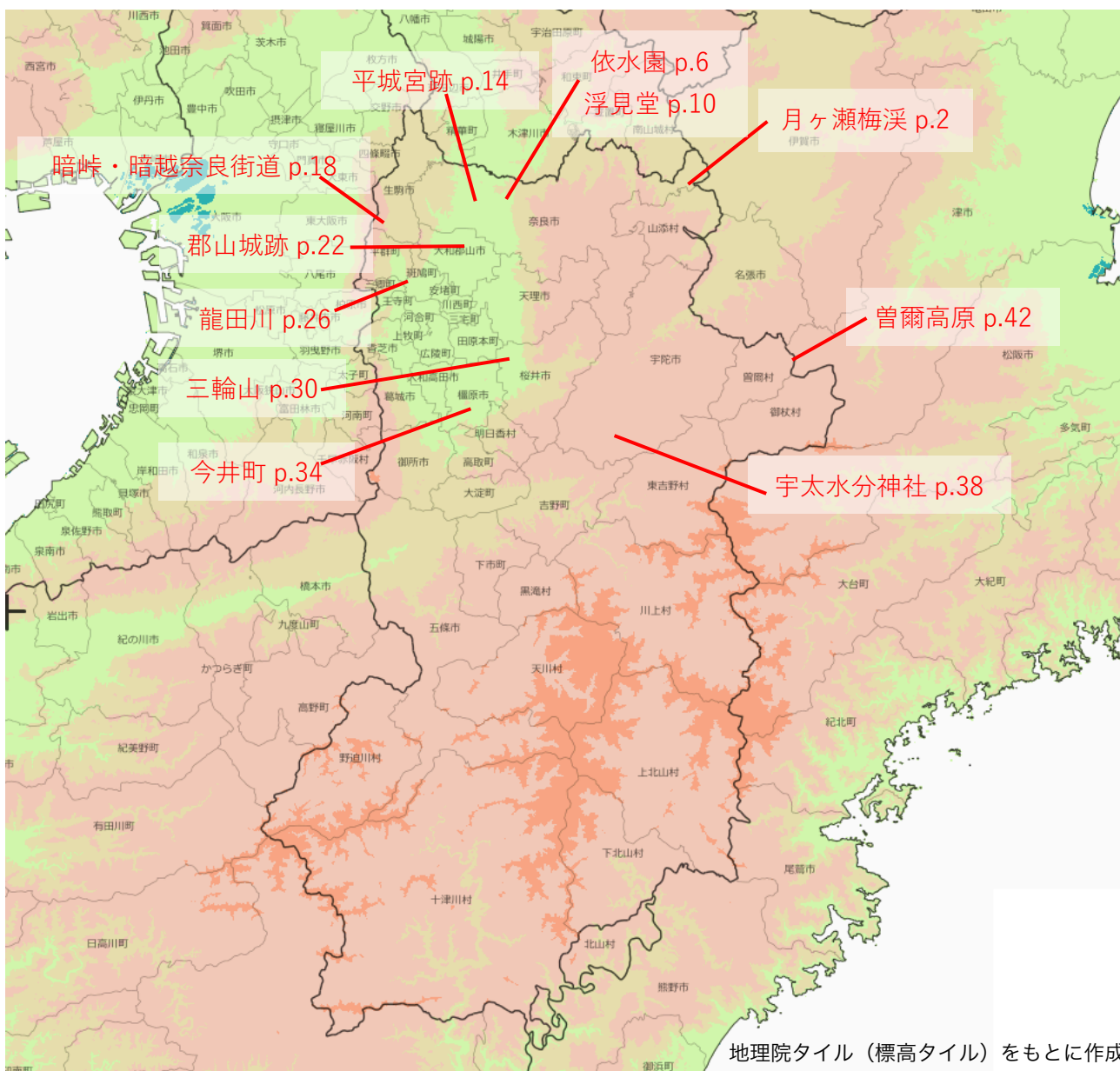


はじめに

奈良県観光公式サイト「なら旅ネット」には、歴史・文化 99 件、美術館・博物館 50 件、自然 97 件、世界遺産 17 件と多くの資源が紹介されています。私たちが今、目にする資源は、その場所の自然と、関わってきた人の手によって成り立ってきています。そのことを改めて考えてみる時、資源に対して少し違った見方ができるのではないのでしょうか。

「ガイド」としてはありますが、いわゆるガイドブックではありません。各人が一つの資源をとりあげ、その資源がどのように見出され、評価され今に至っているかという観点、また、資源の価値の維持に、どのように人が関わってきたのかという観点に立ってまとめた、各資源に関する小論集です。ここに記された情報を見て、それぞれの資源を眺めることで、これまでの経過、現在、そして将来について考える機会となればよいと思います。

奈良県立大学地域創造学部観光創造コモンズ景観マネジメント分野（2018 年度 3 回生）



地理院タイル（標高タイル）をもとに作成

月ヶ瀬梅溪

つきがせばいけい



「関西屈指の梅林として有名。2月中旬から3月の間、名張川（五月川）が高山ダムにせき止められてつくる月ヶ瀬の湖岸から山腹にかけて赤や白、約1万本の梅の花が咲き、あたりは甘酸っぱい香りで満たされる。これらの梅はおよそ750年前の鎌倉時代中期に、真福寺の境内に梅が植えられたのが始まりという。江戸時代には文人墨客も相次いで訪れ、芭蕉も感嘆して句を詠んでいる。現在ではシーズンを通して20万人の観光客を集め、写真コンテストや俳句の大会などさまざまなイベントが行われる。また4月上旬には約3000本の桜が咲き、本格的な春の訪れを告げる。」

奈良県ビジュアルビューロー なら旅ネット 月ヶ瀬梅溪より



1/20000「月瀬村」明治25年測図



地理院タイル標準地図より

月ヶ瀬梅溪を評価する視点場に変化はあるのか？

月ヶ瀬梅溪は古くから多くの人によって評価され、価値づけられた場所である。さらに、月ヶ瀬梅溪には一目千本や一目万本、一目八景といった眺望が美しい場所（視点場）がある。しかし、現代出版されているガイドブックでは月ヶ瀬梅溪を取り上げたものは少なく、視点場を紹介しているものもあまり見受けられない。このことから、月ヶ瀬梅溪に存在する視点場（一目千本・一目万本・一目八景）は時代とともにどのように評価されてきたのかについて、見ていきたい。

まず、月ヶ瀬梅溪が評価されてきた特徴として、①名張川とその一帯の山々によって生み出された溪谷、②その山々に植えられた梅の花、の2つが挙げられる。そして、この2つが重なることで、独特の風景を生み出し、多くの人々から評価されるようになったと考えられる。さらに、大正・昭和時代出版の書籍の記載から、月ヶ瀬梅溪は名張川を中心に形成された溪谷を背景として、その手前に梅の花が広がる風景が特に評価されていたことがわかり、この構図で撮影された写真が書籍によく掲載されている。

書籍で掲載された写真



出所：『日本名勝旧蹟産業写真集 近畿地方之部』



出所：『月瀬案内』

このことを踏まえ、月ヶ瀬梅溪を評価する視点場の変化について見ていく。

月ヶ瀬を紹介した1800年代から1938（昭和13）年までの16点の書籍類において、代表的な視点場（一目千本、一目万本、一目八景等）が記載されているかを検討した（表1）。

一目千本



明治時代頃の書籍において、月ヶ瀬梅溪が「梅の吉野」と喩えられていたことから、桜で有名な奈良県にある吉野の「一目千本」に倣って生まれたと考えられる。

出所：『旅の家つと 第28号 大和にしきの巻』

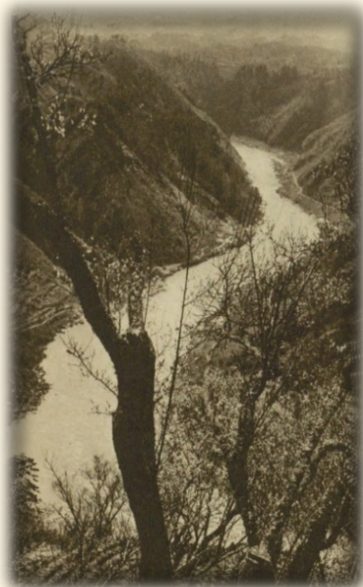
一目万本



出所：『月瀬案内』

手前に梅、その背景に名張川の渓谷が写されており、この構図で写真が撮れる場所として評価されるようになったと考えられる。また、「一目万本」や「一目千本」は梅を見る以上に名張川と周辺の山々によって生み出された独特の渓谷を見る視点場としても評価されていた。

一目八景



ここからの風景はこれまでの視点場とは異なり、渓谷が正面に、より深く見える。そしてその手前に梅が見えることから、これまでの視点場以上に梅と渓谷の風景が美しく見える場所として評価されるようになったと考えられる。

出所：『日本案内記 近畿篇下』

明治時代頃から「一目千本」が視点場として評価されるようになる。この視点場は明治時代以降どの時代においても一定の評価がなされていたと考えられる。そして、大正～昭和時代初期にかけて「一目万本」が評価されるようになり、その後、昭和時代初期から「一目万本」と入れ替わるように、「一目八景」が評価されるようになったと考えられる。

このことから、評価され

る視点場は梅と渓谷の組み合わせがより美しく画像に残せる場所へと時代とともに変化していったのではないかと考える。その背景として、名所の案内が和歌や漢詩による紹介から、絵葉書や画像を伴った案内書が中心になっていったこととの関連があるのではないだろうか。

また、ここで取り上げた3つの視点場のうち、「一目八景」からの風景は昭和時代初期と現在で大きな変化はないように見える。しかし、現在のガイドブックで、これらの視点場が紹介されなくなったのはどうしてであろうか。

<参考文献>

木津亀郎（1922）『月瀬案内』伊賀新報社

鉄道省（1933）『日本案内記 近畿篇下』鉄道省

中尾新太郎（1902）『旅の家つと 第28号 大和にしきの巻』光村写真部

西田繁造 編（1918）『日本名勝旧蹟産業写真集 近畿地方之部』富田屋書店

表1：月ヶ瀬梅溪を取り上げた書籍類における視点場の記載

書誌情報				各視点場の書籍での記載				
出版年	書籍名	著者等	鹿飛谷	一目千本	一目万本	大観坂	一目八景	
1	1800年代	梅溪道の栞	曉晴翁					
2	1858 安政5年	梅溪真景之図	画図：松川半山霞居 出版：鍛冶屋兵蔵		○*			
3	1890 明治23年	内国旅行 日本名所図絵 1巻	上田文斎 高山堂		○			
4	1902 明治33年	旅の家つと 第28号 大 和にしきの巻	中尾新太郎 光村写真部		●			
5	1903 明治36年	大和巡	水木要太郎 第五回内国勸業博覧会 奈良県協賛会		○			
6	1935 昭和10年	文墨余談 ※出版は昭和10年だ が、著者が月ヶ瀬を訪 問したのは明治36年の ため、配列を変更	市島謙吉 翰墨同好会		○			
7	1911 明治44年	郊外探勝その日帰り	落合昌太郎（浪雄） 有文堂書店	○	○	◎	○	
8	1914 大正3年	日本一周 前篇	田山花袋 編 博文館		○	○		
9	1918 大正7年	近畿名所一日の遊覧	野田文六	○	○*	○*	○	
10	1918 大正7年	日本名勝旧蹟産業写真 集 近畿地方之部	西田繁造 編 富田屋書店			○		
11	1922 大正11年	月瀬案内	木津亀郎 伊賀新報社		○	●	○	
12	1923 大正12年	新撰鉄道旅行案内	安治博道 藤井友次郎 野田文六 駈々堂旅行案内部	○	○	○	○	
13	1929 昭和4年	日本一周旅行	小学生全集編集部 編 興文社		○	○		
14	1930 昭和5年	鉄道旅行案内	鉄道省					
15	1933 昭和8年	日本案内記 近畿篇下	鉄道省		○*	*	○*	
16	1938 昭和13年	大和めぐり	日本旅行協会		○		○	

注

各名所の書籍での記載の記号について… ○：本文中、◎：写真、●：本文と写真の両方、
*：地図中

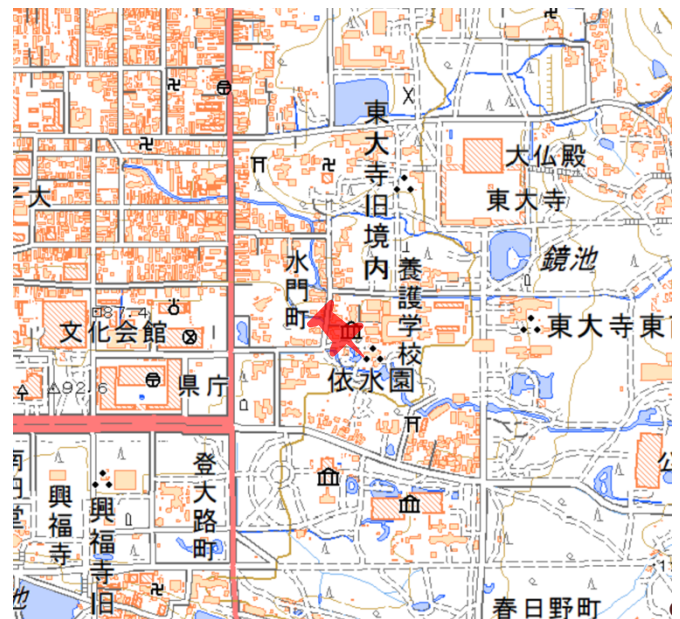
依水園 いすいえん



「二つの庭園からなる依水園は奈良を代表する池泉回遊式庭園で、その面積は 3400 坪(約 11,000 m²)にもなる。前園は江戸時代に奈良晒の御用商人 清須美 道清が作り、後園は若草山、東大寺南大門、春日山や御蓋山を借景とし、明治時代に実業家 関藤次郎により作られた。このほか、園内には古代中国の青銅器や朝鮮の高麗・李朝の磁器、日本の茶道具などを所蔵、展示する寧楽美術館がある。」
 奈良県ビジターズビューロー なら旅ネット 依水園より



1/20000 「奈良」明治 20 年測量



地理院タイル標準地図より

依水園は借景庭園と言えるのか？

まずはじめに「借景」について考える。「借景」とは、論者によって定義に差がみられ、周ら（2012）は、これまでの借景に関する論を整理し、借景を背景と考える「眺望論」や主要物として扱う「主景論」など大きく4つに分類している。本稿では、1920年代から現代に至るまで比較的論者の多い、借景は庭園の主景であるべきとする「主景論」に沿って検討する。上原（1963）は『「借景とは、外の風景美を自園の内容にとり入れるもの、庭師は俗に“生けどり”という。要素としては借景の対象物、自己の設計地、その中間の空間の三つ」そして「対象がたとえ距離は隔たってはいるが、そのものが庭園の主な景趣たる地位を占めているもの。換言すれば対象がなければ平凡で、破調的な景観になりさがってしまうものをいう」、具体的には、「①借景対象物には自然景と人為景があること、②自己の設計地は借景対象を度外視して見た庭園だけではまとまりのない景地であるかも知れないが借景をとり入れて不都合がないよう配植配列すべきこと、③中間の空間には見切り線として塀垣・刈込垣・土坡の肩などを有効に活かすべきこと』と借景に関する技術的説明を行っている。また西沢（1975）は『借景は最初、庭にあった外の風景を眺望することから始まる。次に景を、庭の景の一部としてとり入れ調和させる。さらには借りてきた景が主賓となる。そして庭がそれを軸に展開する。ついには庭は借りてきた景を引き立たせるための、前景にすぎぬまで、自己を滅却した状態になる。』と述べており、上原、西沢の借景についての考え方に沿って、依水園の庭園が外部風景を借景していると言えるのか、「借景庭園」と言えるのかを検討する。

依水園は、奈良県奈良市に位置しており、奈良市の中心部の有名な観光名所である東大寺や春日大社や興福寺が周辺にある。その中でも依水園は周りから隔絶された空間となっている。依水園は江戸時代前期の日本庭園として造られた「前園」と、明治期に造られた周りの景色まで景観として取り入れた「後園」の時代の異なる2つの庭園で構成されている。前園は奈良晒を扱う御用商人であった清須美道清が江戸前期に吉城川のそばに煎茶を愉しむための別邸として三秀亭を移築し、同時期に三山を望む庭園として作られた。後園が今回焦点を当てるいわゆる「借景庭園」とされている庭園である。後園は明治時代に実業家であった関藤次郎により、茶の湯と詩歌の会を愉しむために作られた築山式の池泉回遊式庭園である。園内を歩き、細い石畳を抜けると突然視界が開け、広大な空間が現れる。そこでみられる景色が「借景庭園」として取り上げられることが多い。この景観は園内から遠くに見える若草山、春日奥山や御蓋山、隣接する東大寺南大門、はるかに広がる空までも取り込んだものとなっている。

1958年（昭和33年）の一般公開後、手入れが繰り返され、現在のような美しい景観を見せるようになったのだが、1980年代の交通公社の新日本ガイドでは借景については触れられていない。大和郡山市の慈光院の庭園（図参照）については、「借景庭園」として紹介していることは対照的である。依水園の庭園が借景庭園として紹介されるようになったのはその後の可能性がある。現在、奈良公園の公式ホームページでは、「後園は東大寺南大門と若草山・春日山・御蓋山を取り入れた借景庭園です」と紹介されているが、依水園自体の公式ホームページには借景庭園という表記はなく、若草山や東大寺南大門を「借景している」という記述であった。周（2013）は、これまでの文献で

表1 借景庭園との指摘の多い庭園
(周 (2013) による)

指摘回数	庭園名
23	大徳寺本坊方丈庭園
14	慈光院庭園、圓通寺庭園
13	竜安寺
11	無鄰菴
10	成就院庭園、修学院離宮上御茶屋庭園
9	天竜寺庭園
6	対竜山荘
5	正伝寺庭園、依水園
4	鹿苑寺庭園、岡山後樂園
3	慈照寺庭園、真珠庵庭園、頼久寺庭園、西翁院庭園、孤蓬庵庭園、天然図画亭庭園、玄宮園、碧雲荘、芦花浅水荘
2	栗林園、大通寺含山軒庭園、紫屋寺庭園、菅田庵庭園、平安神宮庭園

表格と考えることができる。

ここでは上原、西沢の定義に基づいて依水園が借景と言えるのかを考えたい。西沢は、「借りてきた景が主賓となる。そして庭がそれを主軸に展開する」とする。この定義から見た依水園はどうか



図1 慈光院庭園

借景庭園として取り上げられている回数をまとめているが、依水園は、比較的多くの文献で取り上げられている (表1参照)。

「依水園は借景庭園と言えるのか」という問いに対し、依水園の景観はあくまで後ろに見える景観を背景にしているにすぎず、借景庭園と呼ぶには少し難しい部分があると考えられる。上述のように、「借景」の定義は論者によって様々であり、それに加えて「借景庭園」に関してはほとんど学術的な定義がされておらず、むしろ借景をしている庭園を単に「借景庭園」と一般的に呼んでいると考えることが妥当かもしれない。図1は依水園と同じく奈良県にあり、表1で二番目に「借景庭園」としての指摘が多い慈光院庭園である。この庭園は、庭園内の風景はかなりシンプルなもの、後ろに見える景色がないと成立しない、いわば借景庭園の代

と考えたとき、依水園庭園は若草山や春日奥山、御蓋山や東大寺南大門を主としているわけではなく、後園内の景観だけで充分庭園として成立していると言えるだろう。借景の対象とされているそれらは背景として依水園内から望むことができるというだけで、それらが主軸となって依水園庭園が展開されているわけではないと考えられる。さらに、上原の説

明からも依水園を見ていきたい。上原の「自己の設計地は借景対象を度外視して見た庭園だけではまとまりのない景地であるかも知れないが借景をとり入れて不都合がないよう配植配列すべきこと」に関してしてみると、借景対象を度外視してみた庭園だけでもまとまりのある空間として依水園は存在していると言える。「中間の空間には見切り線として塀垣・刈込垣・土坡の肩などを有効に活かすべきこと」に関しては、依水園は庭園内と庭園外に見切り線として刈込等はなく、あたかも庭園内と庭園外の景観が一続きになっているかのように見える。これらのことから依水園は借景を活かした作庭がされているとは言い難い。依水園においては、借景対象物は借景として扱われているというよりもむしろ、後方の古都奈良の美しい景観を見ることができるといふ背景的な扱いに過ぎないのではないだろうか。上原や西沢の借景の考え方によれば、依水園庭園は、そもそも借景により成り立っている庭園であるとは言い難いこととなる。その考えによれば「借景庭園」と整理されることはない。依水園が借景庭園であるという認識は世間一般的に持たれているあくまでイメージであり、上原や西沢の考えによると借景庭園とは言い難い。一方で、依水園の公式ホームページでは、借景していると記されていることから、上原、西沢の借景の定義とは別の考え方で整理されているのであろうか。

依水園は一般的に「借景庭園」として知られており、奈良公園の公式ホームページでもそのように紹介されているが、庭園がある景観が「借景している」と紹介されると、ごく自然に、「そこは借景庭園である」とされ、依水園もそのような経過で借景庭園として紹介されているのではないかと推定される。依水園後園が、どのような経過で、いつの時点で外の景を借景しているとされたのか、いつの時期から「借景庭園」として紹介されることとなったのであろうか・・・。

<参考文献>

上原敬二 (1962) 『日本式庭園』 加島書店, pp.108-113

周宏俊, 小野良平, 下村彰男 (2012) 「日本の造園における借景という用語の性格と変遷」『ランドスケープ研究(オンライン論文集) 5 巻』 pp. 17-27

周宏俊 (2013) 「日本における借景庭園の空間構成に関する研究」『日本建築学会計画系論文集 78 巻 689 号』 pp. 1659-1666

西沢文隆 (1975) 『庭園論 1』 相模書房, pp.324-330

宮元健次 (2014) 『図説 日本庭園のみかた』 学芸出版社

<参考 WEB サイト>

依水園 奈良公園 NARA PARK QUICK GUIDE <http://nara-park.com/spot/isuien-2/>

浮見堂 うきみどう



「奈良公園内の鷺池に浮かぶ檜皮葺きの六角堂。
大正 5 年(1916)に建てられ、昭和 41 年(1966)に修復、平成 6 年(1994)再建された。
夜間はライトアップされ、周辺の桜やサルスベリも見事。」

奈良県ビジュアルビューロー なら旅ネット 浮見堂より



1/20000 「奈良」 明治 20 年測量



地理院タイル標準地図より

浮見堂は景観に溶け込んでいるか？

奈良公園の浮見堂は鷺池に1916年に建築された。設置当時の報道(図1)からは、浮見堂は「浮御堂」と呼ばれ、春夏秋冬の自然の変化を楽しみ、鹿や虫の声を聴くことにも適した場所として設置されたことが確認される。現在も季節ごとの変化を楽しむことが出来る場所として利用されている。

全国には現存していないものを含め7か所の浮見堂・浮御堂が確認される(表1)。うち1か所は3年前に老朽化のため、取り壊された。もっとも有名で古いものは琵琶湖・堅田の浮御堂である。「近江八景」の一つ『堅田の落雁』に描かれる場所としても名高い(図2)。建築年は995年から999年であり、他の浮見堂よりも建築年代ははるかに古い。現在の浮御堂は1939年に再建されたものである。お堂の中には「千体仏」と呼ばれる阿弥陀如来が安置されている。浮御堂からの景色は絶景であり、多くの文化人もここを訪れた。この絶景は今も変わらず多くの人々を感動させている。

「うきみどう」の表記については、琵琶湖・堅田のものは「浮御堂」が使われているが、それ以外は全て「浮見堂」である。奈良公園の浮見堂は建設当初は上述のとおり「浮御堂」と呼ばれていたが、「浮見堂」に変化した。この違いは建物をどのように捉えているかによると考えられる。琵琶湖・堅田の浮御堂は阿弥陀如来像が安置され、「浮御堂」とされている。一方、「浮見堂」はお堂を見る、お堂から外を見る建築物として設置管理され、観光用としての目的が大きいと考えられる。

浮見堂・浮御堂の屋根の形状は四角形、六角形、八角形の三種類がある。これらはいずれも宝形造りと呼ばれる屋根の形式をとっている。宝形造りは方形の建物の場合だけでなく、八角・六角などのいわゆる円堂の屋根でも用いられ(図3参照)、仏教関係の建築に用いられるものがほとんどである。宝形造りの円堂も中世から存在している。最も古い琵琶湖・堅田の浮御堂は宝形造りであり、このほかの浮見堂は仏教関係の建築物ではないものの、琵琶湖の浮御堂をモデルとして、宝形造りの屋根としたと考えられる。奈良公園の浮見堂は四角形の琵琶湖の浮御堂とは異なり、六角形である。

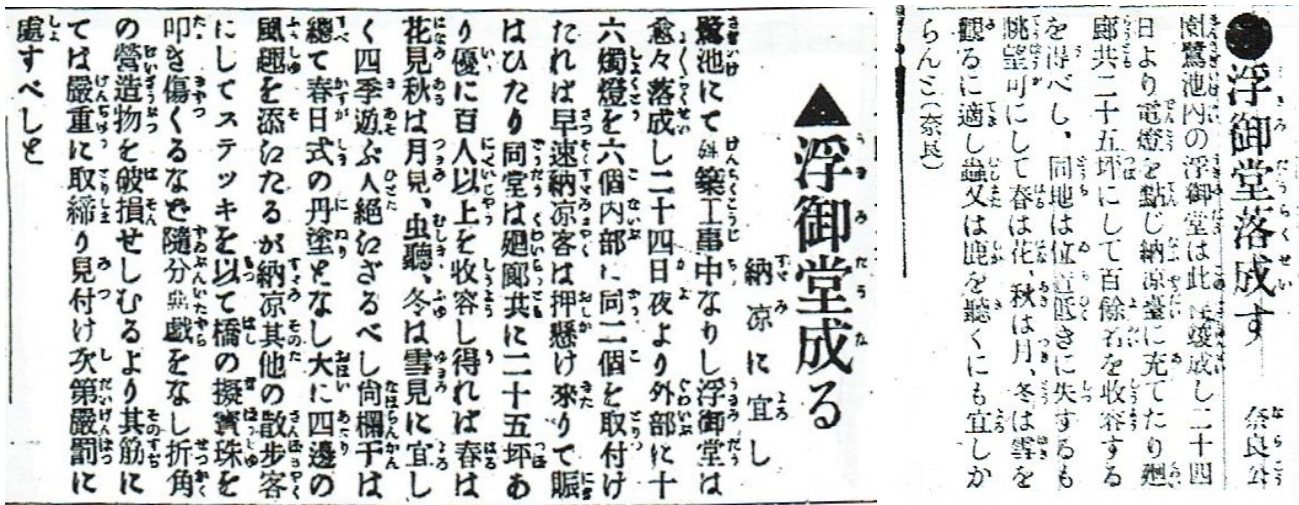


図1 奈良公園鷺池の浮見堂完成時の報道
(左 1916 (大正5) 年7月26日付奈良新聞, 右 同日付大阪朝日新聞)

表1 全国の浮見堂・浮御堂

都道府県名	場所	当初建築年	再建年	形態
<浮見堂>				
北海道	洞爺湖 浮見堂公園	1937年	2003年頃	四角形 2階建て 外壁あり
宮城	気仙沼湾 神明崎の海上	1932年	2019年以降(予定)	四角形
静岡	浜名湖	2006年		八角形
静岡(消失)	弁天島	2015年(消失年)		六角形
大阪	山田池	1980年以降		六角形 外壁あり
奈良	奈良公園・鷺池	1916年	1991~94年	六角形
福岡	大濠公園	1936年		六角形
<浮御堂>				
滋賀	琵琶湖・堅田	995年	1937年	四角形 外壁あり

奈良公園には八角形の南円堂や北円堂があるため、これらを模したとも考えられ、これらの円堂と似たような形であることから人々には慣れ親しまれてきた形といえ、地域の一景観として、違和感なく成り立ってきたと考えられる。そして、その後建築された浮見堂は多角形が多く、これは奈良公園の浮見堂をモデルとした可能性も高い。

水上に建物が設置されている風景については、最も古い堅田の浮御堂は近江八景で紹介され、湖上に宝形造りのお堂が建つ風景は多くの人に知られていた。そのため、その他の地域で水面上に宝形造りのお堂があっても違和感なく受け取られ、景観の一部として容易に受け入れられてきたのではないかと考えられる。

宮城県気仙沼市の浮見堂は、東日本大震災により施設が破損したが、地元民と気仙沼出身者からの寄付金により、再度設置される予定である。このように何らかの原因により消失したのちでも、地域のシンボルとして再建されることもみられ、浮見堂のある風景は多くの人に親しまれるものとなっている。



図2 近江八景 堅田落雁 広重(安政4年)
国会図書館デジタルコレクションより



図3 宝形造の屋根（八角円堂：興福寺北円堂）

<参考文献>

- 井上充夫（1959）「墓廟と宝形造り」『日本建築学会論文報告集 第61号』
大阪朝日新聞，1916/7/26 付け
三陸新報，2017/8/31 付け
奈良県（1982）『奈良公園史』
奈良新聞，1916/7/26 付け
満月寺「浮御堂パンフレット」

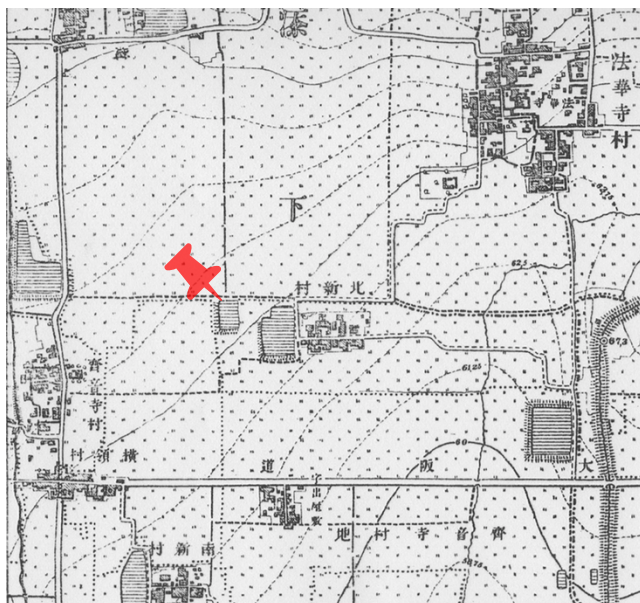
平城宮跡

へいじょうきゅうせき

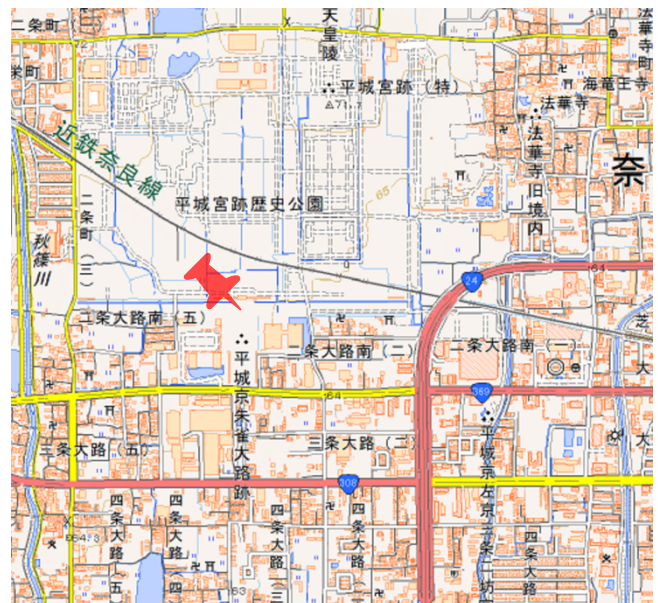


「平城宮跡」は、和銅3年（710）に藤原京より遷都された平城京の中心であった宮跡。1998年2月に「古都奈良の文化財」として、世界遺産に登録されました。2018年3月24日（土）に5つの複合施設のある「朱雀門ひろば」がオープンし、「平城宮跡歴史公園」となりました。・・その他、「平城宮跡資料館」、「遺構展示館」、「復原事業情報館」では、多数の出土品の展示、復元模型、遺構などが公開されています。「第一次大極殿」や「東院庭園」、「朝堂院」や平城京遷都1,300年の記念事業の一環として復原された「朱雀門」など、数多くの復元施設が全域にわたって点在します。今も日々新たな発見が絶えない、何度も訪れたい施設です。」

奈良県ビクターズビューロー なら旅ネット平城宮跡より



1/20000「奈良」明治20年測量



地理院タイル標準地図より

平城宮跡の復原は観光に効果があったのか？

古くは、江戸時代に北浦定政により平城宮の研究が行われた。明治時代には関野貞、喜田貞吉などによる研究により都の姿が明らかにされ、棚田嘉十郎や溝辺文四郎など地元の人々を中心に保存会が設立された。大正時代には、平城宮第二大極殿・朝堂院跡が史蹟に指定され、昭和時代に入ると平城宮跡の一部が特別史蹟に指定され、その後も順次追加指定された。平成には、平城宮跡を含む「古都奈良の文化財」がユネスコの世界遺産に登録され、また朱雀門などの復原も順次なされている。遺跡の復原により、観光面でどのような影響があったのだろうか。

1978年に文化庁が策定した「特別史蹟平城宮跡保存整備基本構想」では、特別史蹟平城宮跡を「遺跡博物館」と位置づけて、観光資源の活用として、復原建物の設置が活用の前提となっている。表1に平城宮跡の観光資源としての活用に関連する、施設設置、建物復原の経過をまとめた。

表1 平城宮跡の施設設置、建物復原の経過

1922年（大正11年）	平城宮第二次大極殿・朝堂院跡が史蹟に指定
1967年（昭和42年）	東院庭園の遺跡発見
1970年（昭和45年）	平城宮跡資料館・遺構展示館 開館
1988年（昭和63年）	なら・シルクロード博開催
1998年（平成10年）	朱雀門・東院庭園 復原 「古都奈良の文化財」の構成資産の一つとしてユネスコ世界遺産に登録
2010年（平成22年）	第一次大極殿 復原 平城遷都1300年祭 開催 平城宮跡資料館リニューアル
2015年（平成27年）	第一次大極殿院復原事業情報館 開館
2018年（平成30年）	平城宮跡管理センター開設、「朱雀門ひろば」 開園 平城宮いざなみ館、天平うまし館、天平みつき館、天平みはらし館、天平つどい館 開館 遣唐使船 復元展示

旅行ガイドブックにおいて平城宮跡の掲載、紹介の経緯を見ることにより、復原がどのように影響しているかをみる。

表2を見ると、1970年には資料館や遺構展示館が開園されてはいるが、1991～1992年版には平城宮跡の存在は地図の上で表されているだけで、観光地としての紹介には至っていない。朱雀門の復原が進行する段階から掲載が増え始め、1998年に朱雀門・東院庭園が復原され、平城宮跡がユネスコの世界遺産に登録されてからは、写真も掲載も増え、復原箇所だけでなく発掘箇所も簡単に紹介されるようになる。平城宮跡の観光ガイド掲載が大きく変わったのが、平城遷都1300年記念祭からである。記念祭に合わせて復原された第一次大極殿が新たに掲載された。これ以降平城宮跡に焦点があてられ、それまではあまり詳しく紹介されていなかった第二次大極殿や資料館もカラー写真で掲載されるようになったと考えられる。

表2 雑誌「るるぶ」1991年～2016年掲載状況

年	タイトル	地図	発掘現場・覆屋	朱雀門	第一次大極殿	第二次大極殿	東院庭園	内裏	朝堂院	平城宮跡資料館	遺構展示館	平城京歴史館	案内MAP	紹介文
1991～92	京都奈良													
1993	奈良	○	○・白黒							○				記載なし
1994～95	奈良	○												佐保・佐紀路エリアの地図に大極殿跡と平城宮跡資料館の記載あるのみ
1995～96	奈良		○	△				○	○・白黒	○				約300字の紹介文
1996～97	奈良	○	○	△					○・白黒	○				約300字の紹介文
1998	奈良		○	○・白黒			○			○				東院庭園模型の白黒写真掲載
1999	奈良			○・カラー			○・カラー	○・カラー		○				朱雀門の鬼瓦・置物、飾り金具も掲載
2000	奈良を歩こう	○		○・白黒		○	○	○						世界遺産登録記述
2001	奈良を歩こう	○		○・白黒		○	○							世界遺産登録記述
2002	奈良を歩こう			○		○	○	○		○	○			世界遺産登録記述
2003	京都奈良			○・白黒		○	○	○						世界遺産登録記述
2004	奈良を歩こう	○・カラー		○・カラー		○	○	○		○				世界遺産登録記述
2005	奈良大和路	○・カラー		○・カラー	△	○	○・カラー	○		○				世界遺産登録記述
2006	奈良大和路	○・カラー		○・カラー	△	○	○・カラー	○						
2008～09	奈良大和路	○・カラー		○・カラー	△	○・カラー	○			○	○・カラー			平城宮・長屋王の歴史カラー漫画で見開き4ページ掲載
2009～10	奈良大和路			○・カラー	○・カラー	○・カラー	○・カラー	○・カラー		○・カラー	○・カラー	○・カラー	○・カラー	平城遷都1300年、国営歴史公園化の記述
2011～12	奈良大和路			○・カラー	○・カラー	○・カラー	○・カラー	○・カラー		○・カラー	○・カラー	○・カラー	○・カラー	平城遷都1300年祭のイベント紹介
2012～13	奈良	○・カラー		○・カラー	○・カラー	○・カラー	○・カラー	○・カラー		○・カラー	○・カラー	○・カラー	○・カラー	遣唐使船カラー写真
2013～14	奈良			○・カラー	○・カラー		○・カラー			○・カラー		○・カラー	○・カラー	目次に平城宮跡あり、1ページにカラー刷りで平城宮跡を紹介
2015～16	奈良			○・カラー	○・カラー		○・カラー			○・カラー		○・カラー	○・カラー	

○＝掲載、△＝復原中表記、白黒・カラー＝写真掲載

平城宮跡（第一次大極殿）の復原と「平城遷都 1300 年記念祭」の相乗効果により旅行ガイドブック掲載に大きな影響を与えたと言える。朱雀門・東院庭園から第一次大極殿に至る一連の復原が、復原された個々の施設の紹介だけでなく、平城宮跡の紹介記事を増やすことにつながり、復原事業が平城宮跡の観光資源としての紹介に一定程度の効果を与えたと言える。



図 1 第一次大極殿院の南門完成図

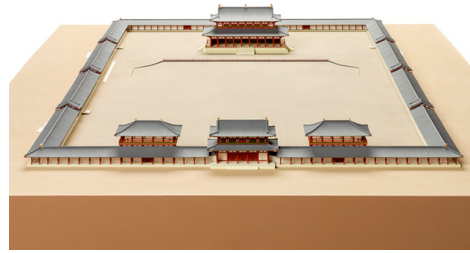


図 2 第一次大極殿院の南門(手前中央)

国土交通省近畿地方整備局国営飛鳥歴史公園事務所平城宮跡歴史公園
<https://www.heijo-park.go.jp> より



図 3 復原中・第一次大極殿院の南門
(筆者撮影)

平城宮跡では現在、南門の復原が進められており、2024 年に完成予定である（図 1～3）。「東西楼」「回廊」などが順次復原される。全部が完成するまでには 20 年はおかるとのことである。それらが完成すると、朱雀門、第一次大極殿と点であった復原が、平城宮の復原という面になる。今まで、旅行ガイドブックには東院庭園も含め個々に紹介され、復原箇所が増えるとその分掲載される内容も増えてきたと言えるが、平城宮という面的な復原になると果たして復原建物の量に比例して掲載量が増えていくのであろうか。今後、南門などが復原されることにより、旅行ガイドブックへの掲載情報がど

のように変化していくのかが注目される。

<参考文献>

国土交通省 近畿地方整備局（2008）『国営明日香・平城宮跡歴史公園 平城宮跡区域基本計画』

国土交通省 近畿地方整備局（2010）『国営明日香・平城宮跡歴史公園 【再評価】』

JTB パブリッシング 『るるぶ奈良』『るるぶ奈良京都』『るるぶ奈良を歩こう』

文化庁（2008）『特別史跡平城宮跡保存整備基本構想推進計画』

<参考 WEB サイト>

平城宮跡歴史公園ホームページ <https://www.heijo-park.go.jp/>

平城宮跡クイックガイド <http://heijo-kyo.com/>

平城宮跡資料館ホームページ <https://www.nabunken.go.jp/heijo/museum/>

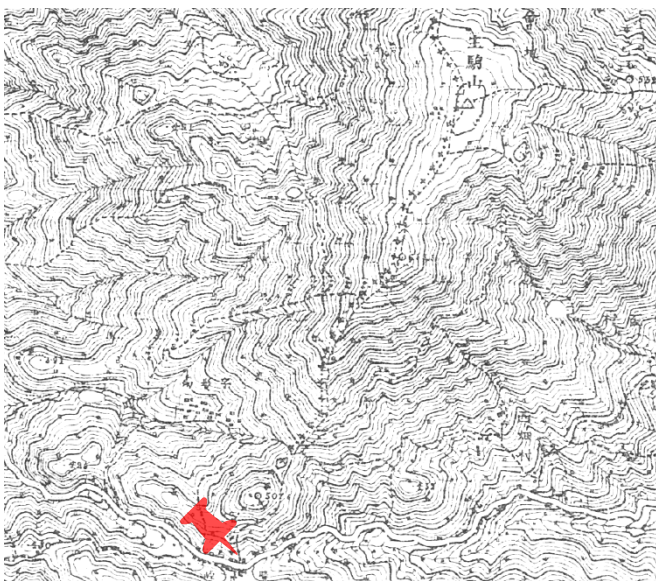
暗峠・暗越奈良街道

くらがりとうげ・くらがりがえならかいどう

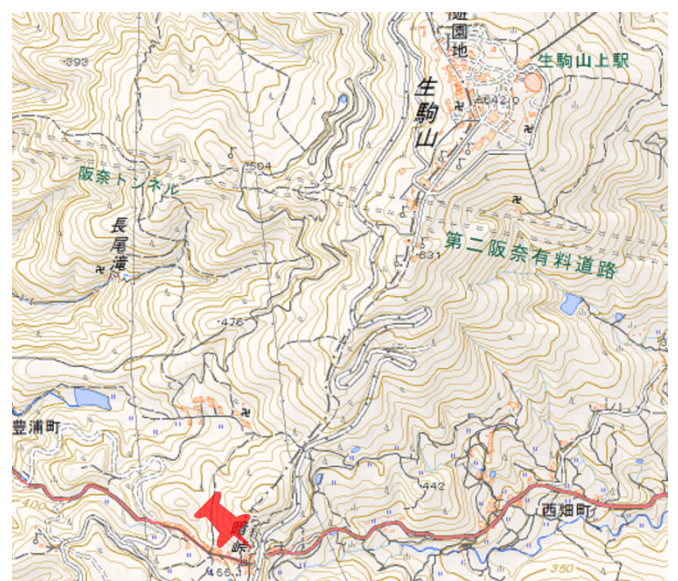


「日本の道 100 選」に選ばれている「暗峠奈良街道」は大阪と奈良を結ぶ往時の幹線道路で、現在も国道 308 号線として現役の道路です。府県境の暗峠は、日本の峠 100 選に選ばれており、当時の面影をしのばせる石畳が今も敷かれています。峠付近には、ハイキングコースもあります。」

奈良県ビジターズビューロー なら旅ネット 暗峠暗越奈良街道より



1/20000「生駒山」明治 19 年測量



地理院タイル標準地図より

暗峠・暗越奈良街道の現在の価値とは、何であるのか？

暗峠・暗越奈良街道は、大阪と奈良を結ぶ最短経路として古くから多くの人に活用されてきた。その始まりは奈良時代ともされており、その当時は難波と平城京を結んでいた。また、江戸時代に入ると、郡山城を藩庁とした郡山藩が藩主を乗せた籠が険しい峠道で転ばないようにと石畳が敷かれ、活用されていた。しかし、明治以降、鉄道や他の道路の整備が進み、暗峠・暗越奈良街道は大阪から奈良へ向かう最短距離であるものの、安全性や快適性が他の道に劣るため、利用する人が減少していった。では、江戸時代以前と比較し、利用されることが少なくなってきた暗峠・暗越奈良街道の現在の価値はどのような点にあるのだろうか。

この街道は、1986年に旧建設省などによって制定された「日本の道100選」の一つに選定されており、現在では、国道308号となっている。枚岡から暗峠にかけての登坂路は急斜面となっており、道も木々に覆われて鬱蒼としている。しかし、暗峠から生駒へかけての道は、うって変わって棚田が広がる、とても開けた風景になっている。現在の暗峠・暗越奈良街道の価値の一つは、街道の周りに広がる棚田ではないかと考えられる。

図2～図4は、暗峠よりも東側（奈良側）の範囲（図1の点線枠部分）の空中写真である。図2は1961年5月の写真で、黄色く塗られた線が暗越奈良街道、暗峠は範囲に含まれていないが、峠の東側の街道沿い100mから1700mほどの間の状況である。図2では、A～Hのいずれの地点にも棚田が広がっている様子が見える。暗峠から奈良方面へ向かう視点で考えると、街道の両側に棚田が広がっていることから、この時街道を歩いていた人には、峠を越えた時にとっても開けた風景が見えていたと考えられる。図3は、1985年7月の同地点の航空写真である。明らかにC地

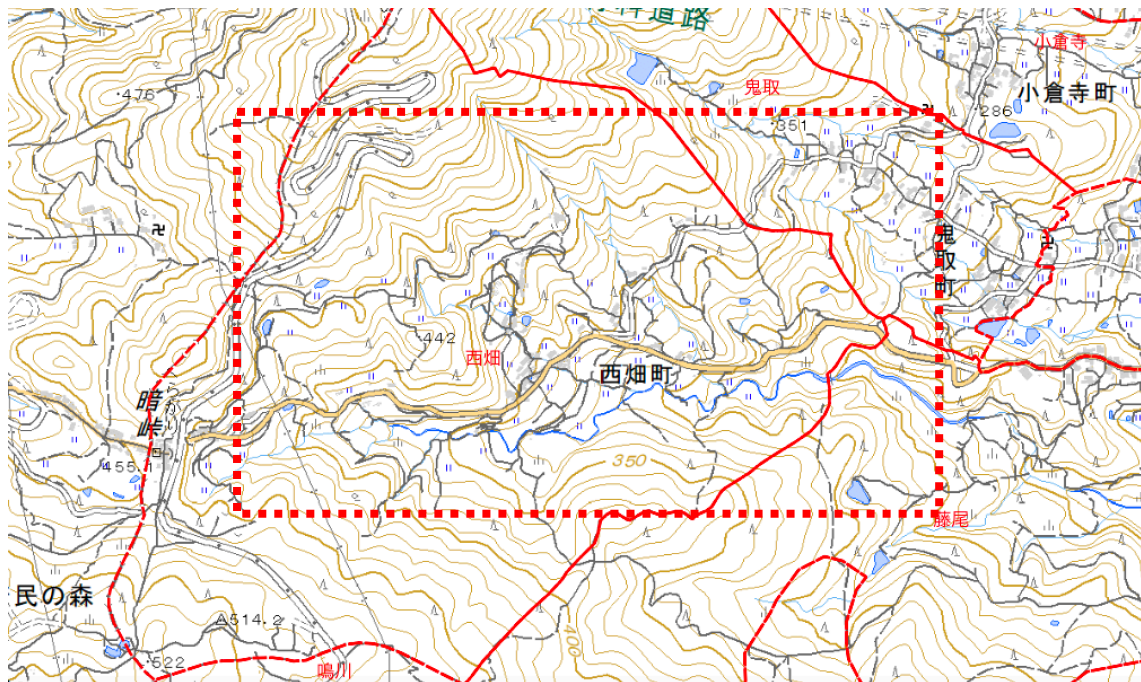


図1 暗峠東側の調査対象範囲（地理院地図に2015年農林業センサス農業集落境界データを表示、赤点線枠が図2から図4の空中写真の範囲）

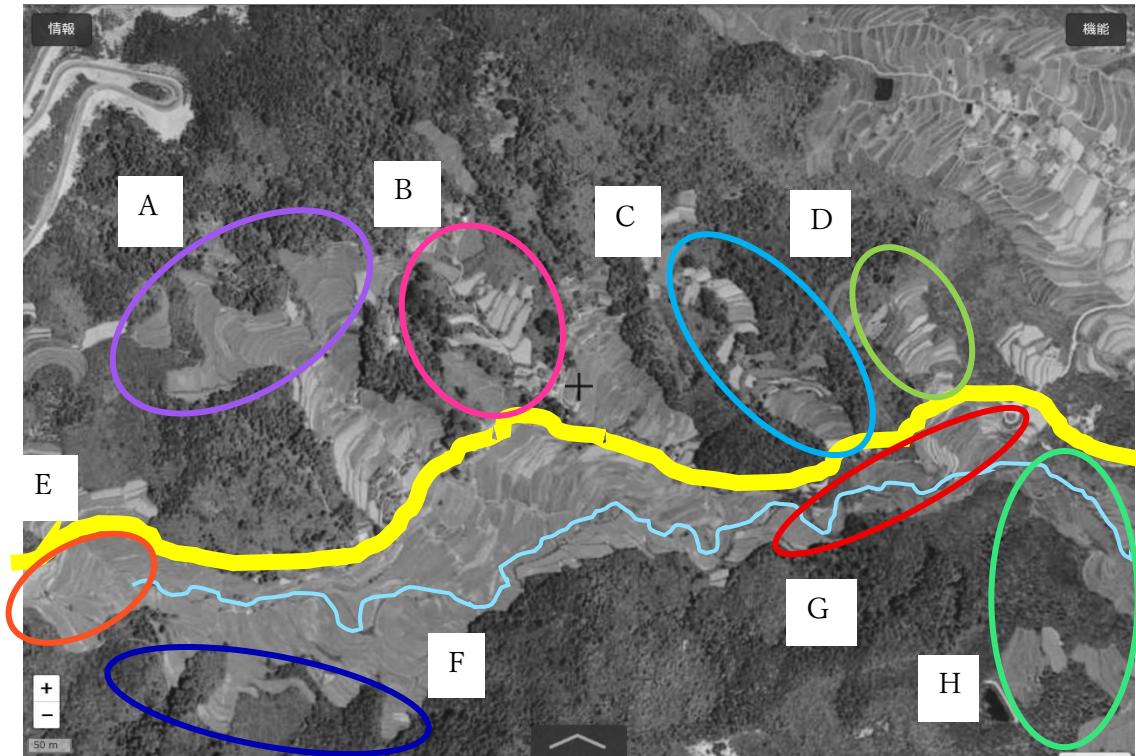


図2 1961年5月の西畑地区の状況（国土地理院空中写真）

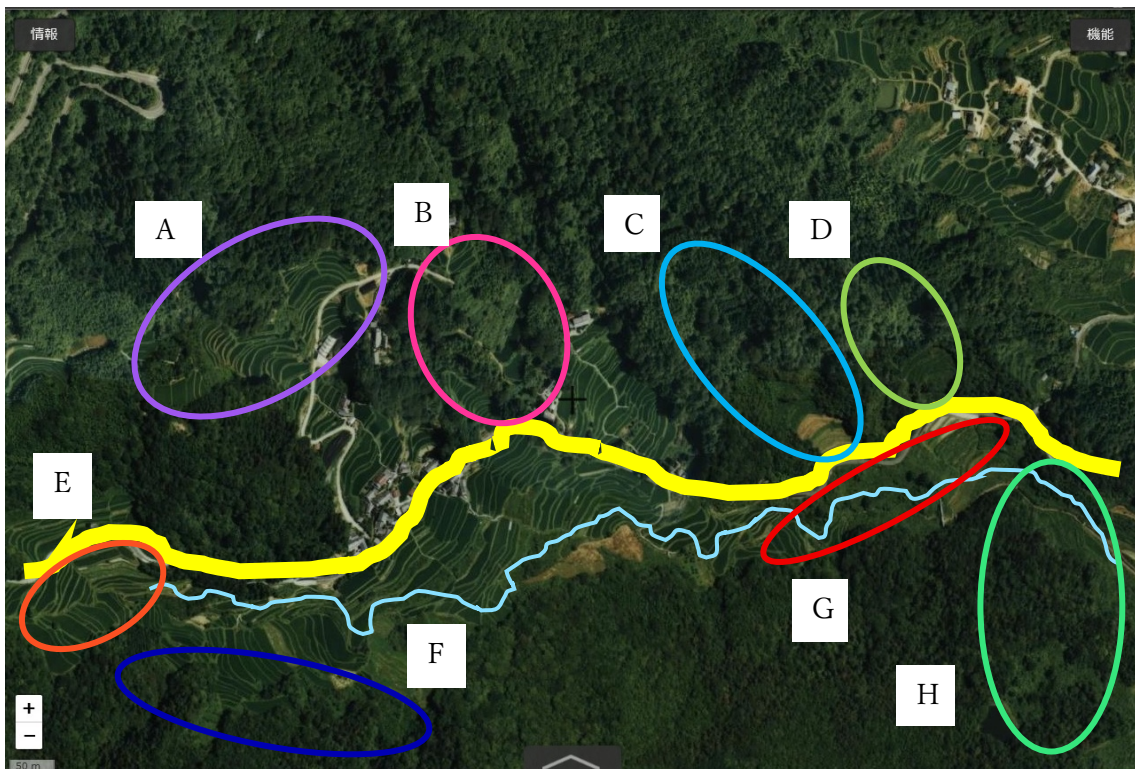


図3 1985年7月の西畑地区の状況（国土地理院空中写真）

点とD地点の様相が変化しているのがわかる。C地点の上方は木々で覆われ、D地点もその傾向は顕著である。C、Dに面した街道では棚田の景色が両側に見られる状況ではなくなってきている。図4は2008年5月の同地点の空中写真である。1961年時点から考えると、ほぼ全地点が変化を遂げている。空中写真でも確認できるようにC地点、D地点などは、集落から少し距離のある地点

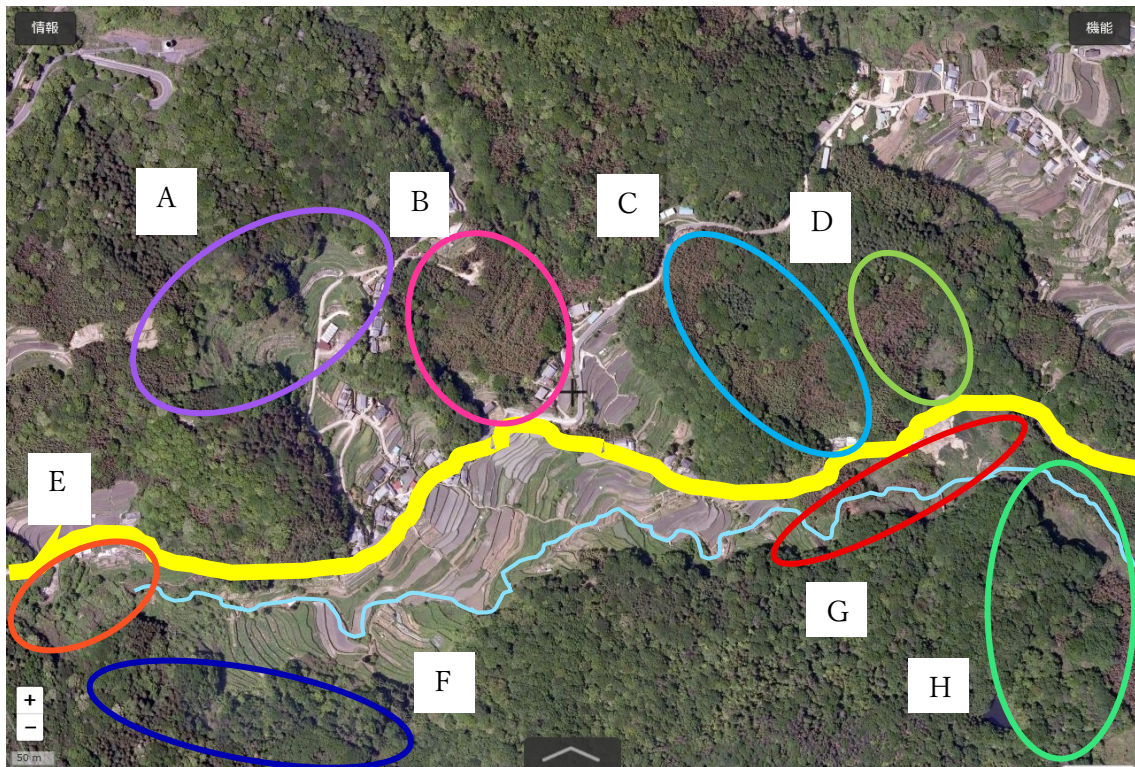


図4 2008年5月の西畑地区の状況（国土地理院空中写真）

であることなどから、時代の経過とともにみるみる棚田は姿を消していき、現在では、耕作放棄地となって樹木が生い茂っている状況となっている。1961年～2008年までの40年あまりの間に街道周辺の風景は、大きく変化を遂げてしまった。しかし、その中で、E地点からG地点までの街道の下側の棚田、ここは奈良方面に街道を歩く人の目に一番入りやすい場所であるが、ここは1961年から2008年まで維持されている（冒頭写真参照）。

この地区では、2003年に棚田を保全するためのボランティア団体が発足し、現在に至るまで草刈りや竹林整備、木々の間伐など、棚田を保全するためのさまざまな活動が行われてきているほか、生駒市観光協会が作成しているホームページの中では、この棚田が見える暗峠・暗越奈良街道の一部がハイキングコースとして紹介されたりしている。暗峠・暗越奈良街道を訪れる人には、美しい棚田が広がる光景が目飛び込んで来るわけであり、こうした活動と棚田の価値づけは、棚田が広がる景観の美しさを保全するとともに、暗峠・暗越奈良街道にぜひとも訪れてほしいという思いが込められているのではなかろうか。棚田を保全しようとする活動は、棚田と暗峠・暗越奈良街道を一体のものとして新たな価値を生み出していると人々が考えた結果であるといえよう。

現在では、街道周辺に限られて存在する棚田であるが、街道を通る中でよく目に入る棚田の維持を行うことで暗峠・暗越奈良街道の価値を高めていくことになるだろう。

<参考 WEB サイト>

生駒市観光協会「生駒の散歩道」 <http://www.ikoma-kankou.jp/hiking/kuragari.html>

近鉄ケーブルネットワーク「いこま棚田クラブ」 <http://www1.kcn.ne.jp/~mkosaka/>

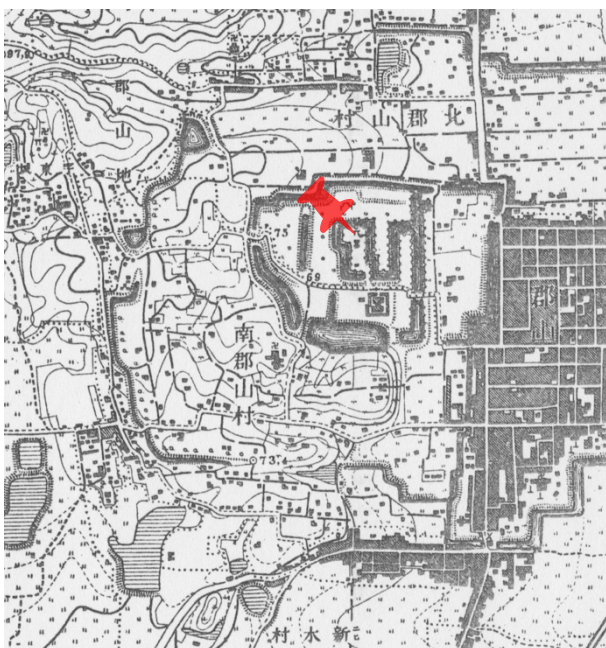
郡山城跡

こおりやまじょうせき

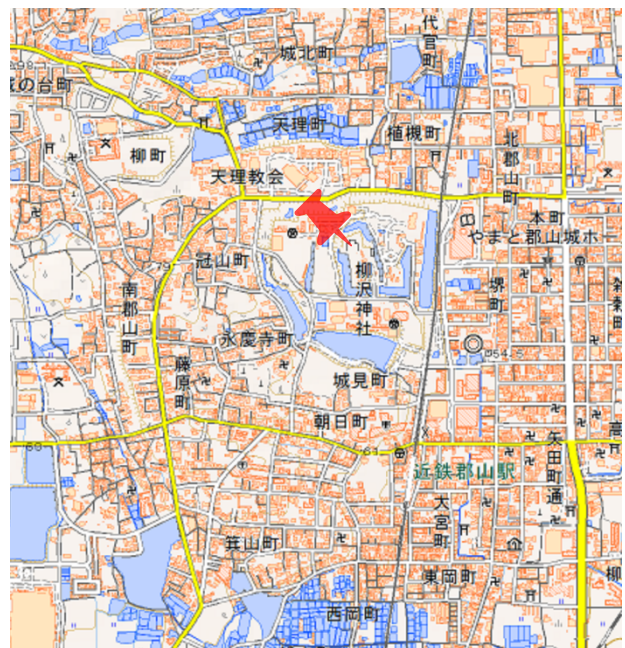


執筆者撮影

「織田信長の時代に、筒井順慶が築城。豊臣秀吉の時代に、豊臣秀長が百万石の居城とし、大幅に拡張された。江戸時代には郡山藩がおかれ、水野氏、松平氏、本多氏などの統治の後、柳澤氏が入り幕末まで続いた。明治維新後、多くの建物は破却されたが、近年、追手門・櫓・天守台などが修復・整備され、城跡に一段と風格を添えている。「続日本 100 名城」(財団法人日本城郭協会)に認定されている。城跡は桜の名所としても有名で、満開の桜のもとで開催される「大和郡山お城まつり」は多くの人々で賑わう。」
奈良県ビジターズビューロー なら旅ネット 郡山城跡より



1/20000 「郡山」 明治 20 年測量



地理院タイル標準地図より

郡山城跡は桜の名所であり続けられるか？

大和郡山市によれば、1724年に柳沢吉里が郡山に入城した際、多くの桜を補植し、花の時期には藩士や町民たちの楽しみとなり、その頃から御殿桜と呼ばれ親しまれていたと言われている。やがて明治となり城郭が全て取り払われ、1880年には旧藩士達が柳澤神社を建てて、その周辺に旧藩邸の桜樹を移植し、更に数百株を補植した。その後、樹齢を重ね、花の姿も衰えてきたので、1911年に当時の町長三木忠方が町民に呼びかけ寄付金を募った。桜樹3000本を新しく城跡一円に植えるとともに（現在は800本）、かがり火を電灯に替えた。1921年には大軌電車(現在の近畿日本鉄道)の開通により遠く大阪方面からも見物客が訪れるようになった。

江戸時代から郡山城跡は人が多く来る場所だったと考えられる。1921年の鉄道の開通で大阪方面からも見物客が訪れるようになり、観光地として集客は大正時代から増えたものと考えられる。郡山城跡は四季によって見どころが異なり、春は桜、夏はつつじ、秋は紅葉、冬は梅といった見どころがある。他にも、盆梅展やお城まつり、親子祭りといったイベントがある。郡山城跡の観光ガイドブックやパンフレットにも桜やイベントが大々的にアピールされている。そのため、城跡だけを目的として訪れる観光客は少数派で、多数が桜の見物や何かのイベントを目的で訪れていると推測できる。

大和郡山市観光協会によると、郡山城跡の桜は現在老化による病気が進んでいる箇所があり、伐採するかどうかに悩まされている。そういった現状を含めて、「郡山城跡は桜の名所であり続けられるか」を考察する。

郡山城跡の桜を管理している団体は、大きく分けて大和郡山市観光協会と郡山城跡桜保存会の2つである。その中でも特に郡山城跡桜保存会が郡山城跡の桜を保全するために活動している。大和郡山市観光協会からのヒアリングによれば、郡山城跡桜保存会は、平成23年3月に発足し、構成人数は400人（男性300人、女性100人）である。設立目的は、郡山城跡内にある桜の保全に向けての今後のあり方及び方向性等について調査・検討し、その措置を講ずるためである。活動時期と活動内容に関しては、毎年3月と7月に郡山城跡内清掃活動を行い、5月と9月には郡山城跡内の桜の消毒を行っている。その他にも、「サクラ基金」を設置し、市民の資金協力を呼びかけることや「吉野山保勝会」等の関係団体との協力体制の確立を目指している。

また、桜を保全する上での問題点としては大きく分けて2つある。1つ目は、前述したように桜の老化による病気が進んでいるため、伐採するかどうかに悩まされている点である。伐採により、今まで郡山城跡の桜で代表的だった場所の風景が維持できなくなる恐れがある。2つ目は、新しく桜を植樹するには1本の桜につき、半径15mの間隔を空けることが理想であるため、その場所の確保が難しい点である。この2つの問題点に対して、郡山城跡桜保存会は、現在行われている郡山城極楽橋再建・白沢門櫓台整備事業が終了した後に、桜を伐採するかどうかが桜の植樹場所などを検討していきたいと考えているようだ。

図1に大和郡山市観光協会が2010年に作成した郡山城跡内部や城跡周辺の桜分布図を基に桜の分布の概要を示した。4色は、緑が古木、黄緑が成木、オレンジが幼木、赤が老衰古木となっている。郡山城跡の桜の現状としては、全体的に赤の老衰古木と緑の古木が多く分布している。

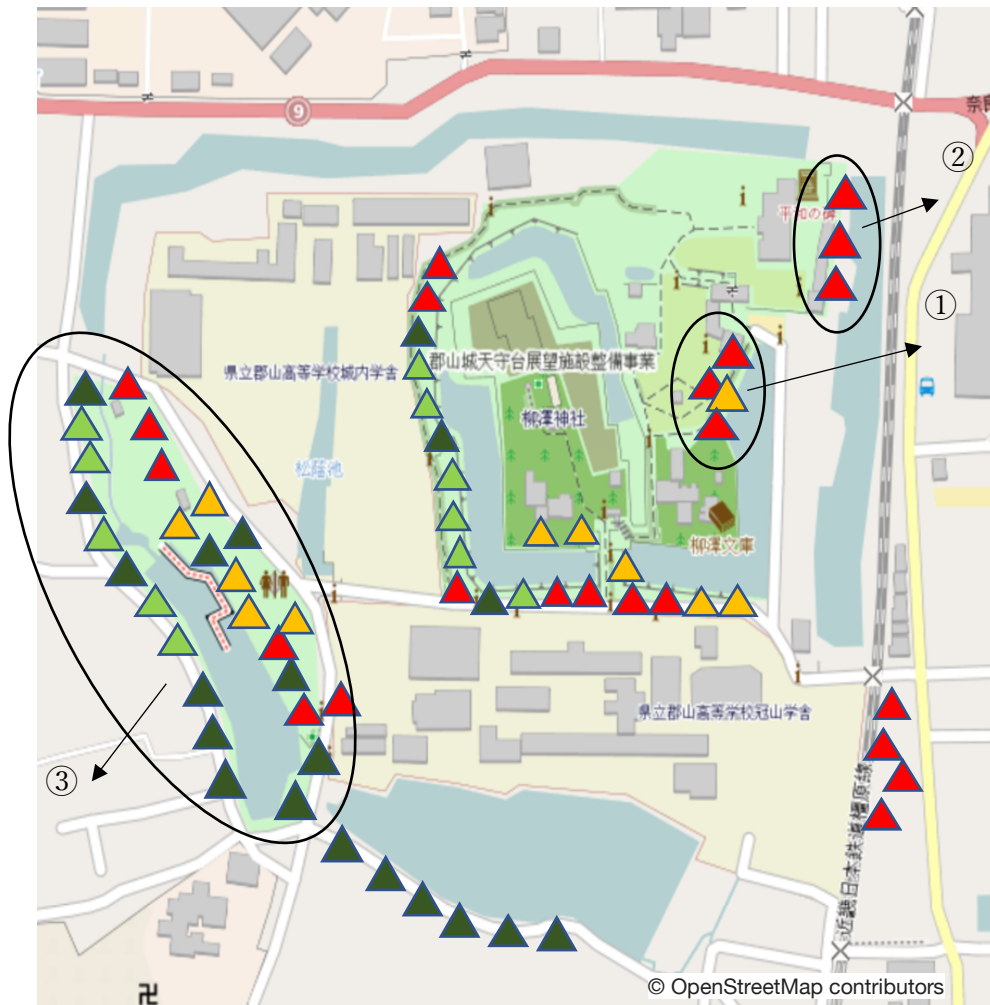


図1 郡山城跡内の桜の分布状況（大和郡山市観光協会作成図をもとに筆者作成）

主要な場所の桜や撮影スポットとして有名な場所に着目し、現状と今後の課題を考察する。まずは、撮影スポットとして一番人気がある追手向櫓の桜である（図2）。図1の①で示した範囲である。郡山城跡の桜といえば追手向櫓の桜といっても過言ではない。

追手向櫓周辺の桜の状況としては、手前の堀沿いに咲いている桜は、幼木や成木が多く、追手向櫓の横から連続している写真左上の桜などは老衰古木となっている。追手向櫓の横から連続して咲いている桜が伐採されることになると、撮影スポットとしての価値が現状より落ちてしまう可能性がある。後継樹の植



図2 追手向櫓の桜（手前と櫓の左手）

樹場所を確保するなどの対応が求められる。

次に、こちらにも撮影スポットとして有名な追手東隅櫓のしだれ糸桜である（図3）。図1の②で示した範囲である。追手東隅櫓のしだれ糸桜も、よく観光客から撮影される桜の1つである。しだれ糸桜に面した堀を挟んで近鉄電車の線路が通っている。近鉄橿原線の九条駅～近鉄郡山駅の区間であり、電車からはっきりと一望できるため、近鉄橿原線の利用者からも知名度が高い桜であるだろう。

現在の追手東隅櫓のしだれ糸桜は全て老衰古木となっており、枯れたり伐採されたりする時期がいずれ来ると、図3のような追手東隅櫓の桜を見ることができなくなる可能性がある。

最後に、図1の③で示した範囲の鰻掘池の桜である。鰻掘池の桜も撮影スポットとして有名である。図1によれば、古木、成木、幼木、老衰古木がバランスよく分布しているため、一気に伐採する必要がなく、計画的に植樹することができる。桜の保全状況としては良いのではないだろうか。



図3 追手東隅櫓の桜

郡山城跡の桜は観光地として注目されてから現在に至るまで老化・病気による伐採や新たな植樹を何度も繰り返してきたであろう。しかし、追手東隅櫓のように、老衰古木が集中している箇所では、今後、桜の風景が大きく変化してしまうことになる。長く桜の名所として維持し続けることは容易ではないことがわかる。桜の名所として維持していくためには、植樹する時期と場所に配慮する必要があるのではないだろうか。一斉に老木となり、伐らなければならない事態を避けるためには、植樹する時期をずらす必要があるだろうし、また、植樹場所に間隔を空けることで、その後植樹する場所が確保できるのではないだろうか。計画的な植栽といった長期的な取り組みは必要とされるが、郡山城跡桜保存会が毎年5月と9月に行っている郡山城跡内の桜の消毒などの日常的な活動を中心に一日でも桜を長生きさせることが重要である。

<参考 WEB サイト>

大和郡山市 郡山城～続日本100名城・日本さくら名所100選～

<https://www.city.yamatokoriyama.nara.jp/kankou/kanko/info/004912.html>

龍田川

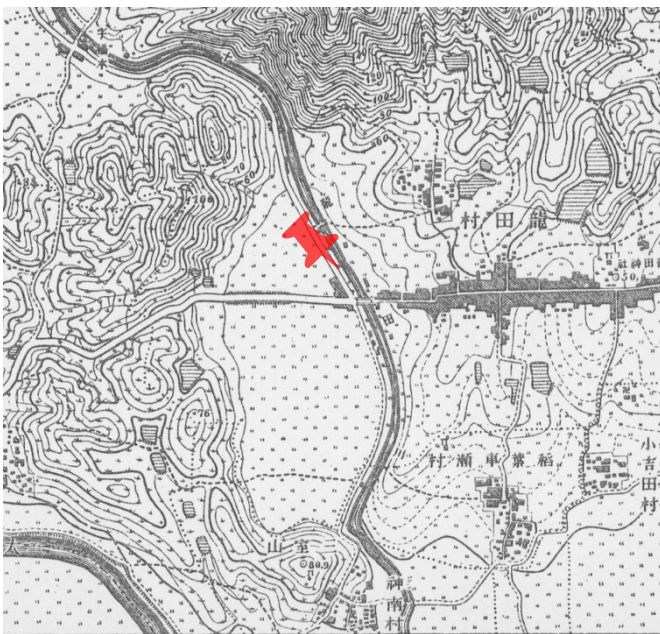
たつたがわ



執筆者撮影

「生駒市内から平群町内を流れ、斑鳩町内で大和川に合流する1級河川。古くから、詠歌の名所として知られ、在原業平の「千早ぶる神代もきかず竜田川からくれないに水くぐるとは」、能因法師の「嵐吹く三室の山のもみぢ葉は竜田の川の錦なりけり」などが特に有名。歌にあるように紅葉の名所でもある。」

奈良県ビクターズビューロー なら旅ネット 龍田川より



1/20000「郡山」明治20年測量



地理院タイル標準地図より

龍田川はなぜ奈良を代表する紅葉の名所ではなくなったのか

奈良県の観光公式サイト「あおによし」でも紹介されているように和歌に詠われた紅葉の名所として広く知られている龍田川。由緒正しきこの川は奈良を代表する紅葉の名所として確固たる地位を築き上げていたといっても過言ではない。実際、『大和名所巡覧記』（1909）や『大和名所案内』（1922）、『日本案内記』（1936）、『花と紅葉』（観光資源要覧 第五編）（1958）、『花の名所案内—美しき自然を訪ねて—』（1966）など、明治後期から昭和中期頃という比較的古い時期に出版されたガイドブックや名所案内には「昔から名高い紅葉の名所」として数多く掲載されている。一方、表1を見れば明らかだが、奈良や関西圏の代表的な紅葉の名所を紹介したガイドブックなどの特集において龍田川は影を潜めつつある。今回分析対象とした10冊中、龍田川が取り上げられていたのは3冊と半分にも満たない結果である。これは10冊中7冊で紹介されている「談山神社」や「正暦寺」、6冊で紹介されている「春日奥山」があることを踏まえれば少ない数字であるということが出来るだろう。このような現状からも龍田川を「奈良を代表する紅葉の名所」ということは難しくなっている。なぜ、かつては一定の評価を得ていたはずの紅葉の名所が今日は顧みられなくなりつつあるのだろうか。

表1：近年のガイドブックにおける龍田川の掲載の有

タイトル	出版年	「龍田川」掲載の有無
奈良花の名所 12 カ月	1997 年	×
奈良・大和路万葉の花 名所めぐり	1999 年	×
紅葉の名所「関西周辺」	2000 年	○
サライ「大特集「平成の都」を旅する」	2006 年	×
大人組 京都・大阪・神戸 11 月号	2006 年	×
サライ「大特集「あおによし」奈良へ」	2007 年	×
サライ「大特集 錦織の大和路への旅 奈良」	2008 年	○
サライ「大特集 いざ、紅葉の奈良へ」	2010 年	○
日本 紅葉の名所 100 選	2010 年	×
サライ「大特集 未体験の奈良へ」	2015 年	×

龍田川の特徴

龍田川の最大の特徴として現在「県立竜田公園」として整備されている区間は人の手で一から作り出された紅葉の名所であることが挙げられる。古くから和歌や能、屏風絵といった幅広い芸術・文化の中で紅葉と結びついた作品が数多く残されてきた龍田川。和歌における龍田川と紅葉の結びつきは平安時代にまで遡ることができる一方で、実際に現在の斑鳩の地に紅葉の名所として、龍田川の整備が行われたという記述が文献にあらわれるのは江戸時代に入って以降のことである。18世紀後半まで現在の斑鳩龍田は紅葉の名所として特に騒がれるほどではなく、ただ歌枕として他と区別される程度であったが、寛永年間に法隆寺並松の国学者藤門周斎が龍田川にカエデの植樹を発案し、整備したことで状況が一変したとされている（大矢、2015）。その後、時代を経て消滅の危機にさらされていた龍田川の紅葉を救ったのは1889年以降、近隣住民によって行われた補植活動である。背景には有栖川宮家からの寄付などに加え、翌年に今の関西本線の前身である私鉄・大阪鉄道が開通したことで、宿場町から転落してしまった竜田町の繁栄策としての思惑があったと考えられている（松本、1976）。今日、私達が観光地として訪れることのできる龍田川は「ちはやぶる」や「嵐吹く」といった和歌を念頭において意図的に作り出された景色なのである。

この成立背景が昨今の龍田川の状況に大きく影響を及ぼしているのではないだろうか。日本全国を網羅しており、2010年出版ということから近年評価されている紅葉の名所を知る一つの有効な

資料である『紅葉の名所 100 選』（※龍田川は含まれない）を分析したところ、100カ所ある全国の紅葉の名所の中で人の手によって作り上げられたものと判断できるのは「国営昭和記念公園」・「曾木公園」・「高島市並木」・「宮島・紅葉谷公園」・「秋月城跡周辺」・「人吉城跡・球磨川沿

表 2：龍田川の歴史年表（本渡（2007）・大矢（2015）・原島（2012）・松本（1976）より作成）

年代	事項
1614	片桐勝元がこの地に城を築いた際に平群川をその外濠とするために現在の龍田川の位置に付け替えた
1789～1801	法隆寺並松の国学者藤門周斎が平群川下流の現・生駒郡斑鳩町龍田に楓の植樹の発案・整備を進めた
1889 頃	川畔に 36 本の古楓があった程度。一時は紅葉の木々は消滅の危機にさえ瀕していたといわれる
1935 頃	1889 年以降、毎年のようにカエデの植樹・保護が進められたことで、1 万本に達する紅葉の景観が整えられた

い」・「御船山楽園」の 7カ所である。また、寺院や神社を始めとする元々紅葉が自生していたであろう箇所に人が植樹した割合が高いもの（「大矢田もみじ谷」・「香嵐溪」・「萬徳寺」・「伊勢神宮内宮神苑」・「湖東三山」・「もみじ谷」・「長岳寺」・「紅葉谷公園」）を含めても合計で 15カ所である。判断がつかかねるものもあったため、多少数は前後するかもしれないが、おおよそ残りの 85カ所は山岳や溪谷などの自然の中に自生している紅葉の名所といえることができる。現在、人々の間で評価を得ている紅葉の名所が圧倒的に自然由来のものが多いことを踏まえると、紅葉の名所を一から作り上げ、それを一定の水準で保ち続けていくことがいかに困難であるかわかるだろう。

景観の転換期

しかし、すでに上記したように古いガイドブックを見れば龍田川が奈良を代表する紅葉の名所として一定の評価を受けていた時代もあったことがわかる。人工の紅葉の名所である点に加え、昭和 60 年代（1985～）にこの地で行われた河川改修が龍田川に及ぼした影響も挙げたい。

明治後期に私製の絵葉書の印刷が許可されると紅葉の名所・龍田川の名所絵葉書も多数印刷された（原島、2012）。図 1 は大正後期から昭和初期にかけて印刷された「龍田川岸の名所絵」で、図 2 は現在の龍田川の景色を撮影したものである。2 枚を見比べれば一目瞭然だが、絵葉書の頃は川岸すぐにカエデの樹々が植えられているのに対して、現代のものは川岸からは大きく距離が開いた位置に植えられている。「大和川水系 河川整備計画（生駒いかるが圏域）」によると、大和川流域はもともと洪水が起きやすい自然条件であったところに加え、昭和 60 年代に急激な都市化が進行し保水機能の減少という社会的条件が合わさったことで流域全体の治水対策が急務になった。そこで県の管理河川であり、度重なる洪水被害を周辺地域に及ぼしていた龍田川も河川改修が推進されることになった。安全や防災面に力点が置かれた改修工事だったため、致し方ない点もあるがこの工事に関しては批判的な声大きい。同資料の中でも「圏域内の県管理河川の整備は、洪水や安全かつ速やかに流化させることを目的としたコンクリート等による画一的なものであったため、動植物の生息環境が損なわれ、瀬や淵もなく、植生も貧しい単調な区画が多くなっている」とあり、県立竜田公園に関しても「全般的には、水質の悪化・急勾配のコンクリート護岸・河川沿いの車道の存在により、人々が水に親しむのは困難な状況になっている」と記述されている。

実際に龍田川を訪れてみたところ、川の両岸はコンクリートで覆われており、低地に掘り下げられた場所を流れる川はモミジと大きく距離があり、水面に散り敷くモミジが浮かぶ、業平が詠った



図1：大正後期～昭和初期の龍田川（原島（2012）より）



図2：近年の龍田川（原島（2012）より）

「ちはやぶる」の光景とは程遠いといわざるをえない。また、植樹されているモミジもどこかまばらで全体としてデザインに統一性を感じることはできなかった。「想像上の紅葉の名所を人が一から作り出した」という他の紅葉の名所には中々見られない独自性を実感することが困難な現状のままでは、自然の中で色づく他の多くの紅葉の名所に太刀打ちすることはできないだろう。近年、県による公園整備の見直しが図られ始めた。専門家の意見を取り入れることはもちろん、持続的な整備を実現するためには協力が欠かせない近隣住民や訪れる観光客の視点に立った公園作りが実現することを期待したい。人が手を加わえたからこそ出せる自然由来のものとは異なる「美」がきっとあるはずである。

<参考文献>

- 東直子編（2006）「奈良人お気に入りの10名所」『サライ』18巻21小学館
 運輸省観光局編（1958）『花と紅葉』（観光資源要覧 第5編），運輸省観光局
 大窪純一郎編（2007）「土地っ子が推薦 紅葉・花名所と美味処⑤」『サライ』19巻21小学館
 大窪純一郎編（2008）「通が推薦するっておきの場所「大和の特別体験」と「私だけの紅葉」」『サライ』20巻19小学館
 大矢良哲（2015）「歌川広重と竜田川の景観-『六十余州名所図会』の旅景色」『日本文化史研究』46
 河内真人編（2010）「龍田大社と竜田公園」『サライ』22巻10小学館
 金沢昇平（1909）『大和名所巡覧記』大和図書
 桑原英文・倉橋みどり（2014）『奈良を愉しむ 奈良 大和路の紅葉』淡交社
 奈良県（2002）『大和川水系河川整備計画（生駒いかるが圏域）』
 小坂眞吾編（2015）「山辺の道 葛城古道 柳生みち 室生古道を歩く」『サライ』27巻11小学館
 主婦の友社編（2010）『見直したい日本の「美」 日本 紅葉の名所100選』主婦の友社
 鐵道省編（1936）『日本案内記 近畿篇下』博文館
 中島史子/山と溪谷社大阪編集室編（1997）『Jガイドホリガー奈良花の名所12ヵ月』山と溪谷社
 奈良縣編（1922）『大和名所案内』奈良縣
 日本植物友の会編（1966）『花の名所案内—美しき日本を訪ねて—』社会思想社
 原島広至（2012）『百人一首今昔散歩』中経出版
 ブルーガイド編集部編（1999）『奈良・大和路万葉の花名所めぐり』実業之日本社
 松本俊吉（1976）『奈良歴史案内』講談社
 本渡章（2007）『奈良名所むかし案内—絵とき『大和名所図会』—』創元社
 山と溪谷社大阪支局編（2000）『紅葉の名所〔関西周辺〕』（花の名所シリーズ）山と溪谷社
 渡部里美（2006）「月の奈良、紅葉の奈良」『大人組 京都大阪神戸』3巻11プラネットジアース

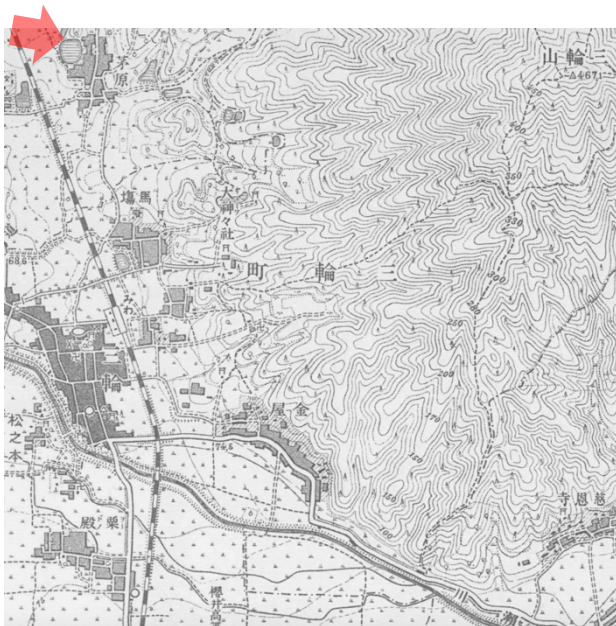
三輪山

みわやま



「古くから、「三諸の神名備」と呼ばれてきたこの山は、神の降臨する山として崇められてきた。山中の3か所に磐座がある。山頂から放射状に石が並んでおり、古代巨石信仰の面影を残している。古代遺跡でもあり、山中からは祭器が出土した。山全体が大神神社の御神体であったことから、以前は禁足の地とされていた。信者に入山が許されるようになったのは、最近になってからのこと。狭井神社より入山する。」

奈良県ビクターズビューロー なら旅ネット 三輪山より



1/20000「櫻井」明治41年測図



地理院タイル標準地図より

三輪山と山辺の道はなぜ価値を転換させたのか？

三輪山は古代より権威ある神社であると認識されてきた。大神神社を起点とする山辺の道とそれに沿う遺跡や古墳群がその証拠であるといえるが、山辺の道はその後失われ、三輪山を中心とした政治体制も受け継がれることはなかった。天皇家が住居を営む「宮」は飛鳥、難波、近江、藤原京、そして平城京へと変遷をたどるわけだが、この間に山辺の道の重要性が失われ、官道である上ツ道、中ツ道、下ツ道、といった街道が重要性を帯びてくる。それは、三輪山の持つ価値や権威が変化した過程とも考えられる。

山辺の道と上ツ道を比較してわかることは大きく分けて二点あげられる。

- (1) 山辺の道が基本的に曲がりくねった山沿いの道であるのに対し、上ツ道は平野部を直線状に伸び奈良盆地を抜けられる道であるということ。
- (2) 山辺の道の起源が明確ではなく、三輪山周辺の一勢力に沿う形で存在していたのに対し、上ツ道は中央集権がなされた国家権力によって、国家事業として敷設されたものである。

(1) の点については道そのものの利便性に大きく関わるため、後世に上ツ道が山辺の道と比べ重要視されたと考えるのに問題はないだろう。(2) の点に関しては、古代国家としての政治に関わる事柄であると考えられる。4世紀までは三輪山とそれを起点とする山辺の道が奈良盆地における勢力の宗教的シンボルであったのにも関わらず、7世紀には天皇家を中心とした権力によって新たな道が敷設されているのである。三輪山と山辺の道の持つ価値の転換には、天武天皇が何らかの関わりを持っている可能性があると考えられる。その理由としては、即位時期が上ツ道の完成時期と一致しており、壬申の乱においてここを戦場としたこと、続く持統天皇の時代にかけて天皇を中心とした中央集権を達成し、下ツ道、中ツ道、上ツ道の起点となる藤原京の建設を目指していたことがあげられる。

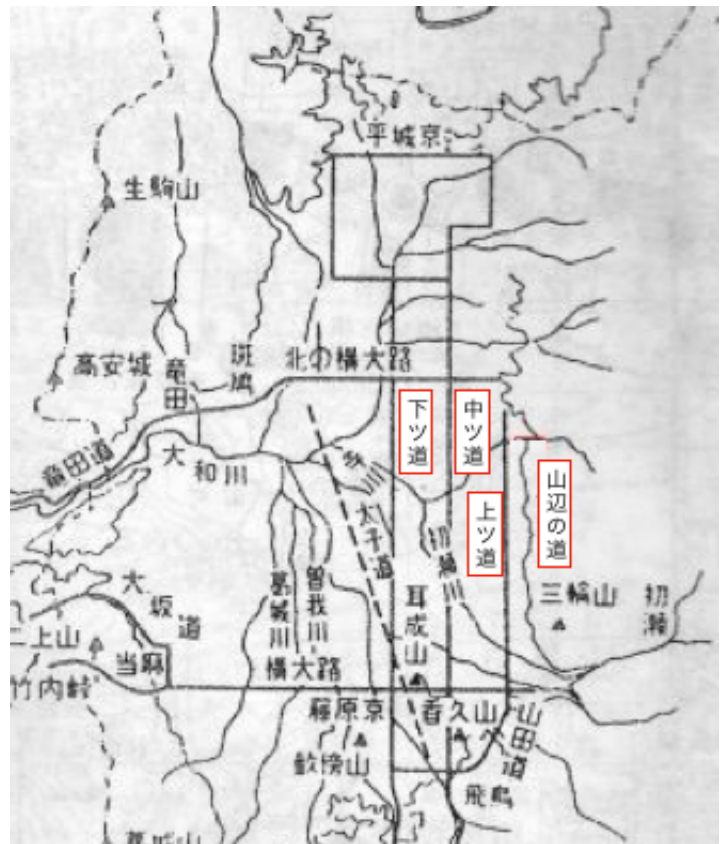


図1 大和の古道概要図(『奈良県史1』1984に加筆)

天武天皇といえば、「八色の姓」「古事記、日本書紀の編纂」「飛鳥浄御原令」などの政策に象徴される、中央集権、律令国家の形成などを実現しようとした人物として知られている。それらの政策の中に、現代にいたる日本の神道を形成したこともあげられる。天武天皇は古事記にある神話のように、天皇家が天照大神の子孫であるということや、地方の神々との関係性を整理し、現在の伊勢神宮での祭祀を重視した。天皇家は天武天皇によって本格的に神格化され国家神道が形成された。これらも中央集権を目的にした政策だと考えられているが、三輪山はこの政策によって天皇家のルーツからは切り離され、出雲の神である大国主大神の和魂である大物主大神の鎮まるところとされている。

・考察

卷向遺跡を中心としたかつての遺構を根拠地とし3～4世紀に奈良盆地に存在した権力にとって、三輪山は政治権力の象徴であったと考えることができる。また、三輪山を起点にしてのびる山辺の道は、その周辺に存在した勢力のいわば幹線道路であったと考えられる。しかしそれぞれの価値は、国家として中央集権を果たした天皇家の政治権力によって変化がもたらされる。天武天皇による国家的な宗教の転換は中央集権を理由とするものであったとされるが、7世紀半ごろには三輪山の象徴性は失われ、山の辺の道は国家事業として敷設された上ツ道に対し、道路の利便性という面も含め、奈良盆地における幹線道路としての位置を占めることはできなかったと考えられる。古代日本に複数存在したとされる各王朝の関係性を考察するうえで、権力の象徴となっていた三輪山の価値が転換されていったという事実に着目する必要性は高いといえる。天皇家とそれ以前に存在していた勢力との関係を検討するうえで意義があるだろう。

<参考文献>

青山茂、沢田重隆（1989）『奈良の街道筋〈上〉』草思社
 青山茂、沢田重隆（1991）『奈良の街道筋〈下〉』草思社
 上田正昭、門脇禎二、櫻井治男、塚口義信、和田萃（2003）『三輪山の神々』学生社

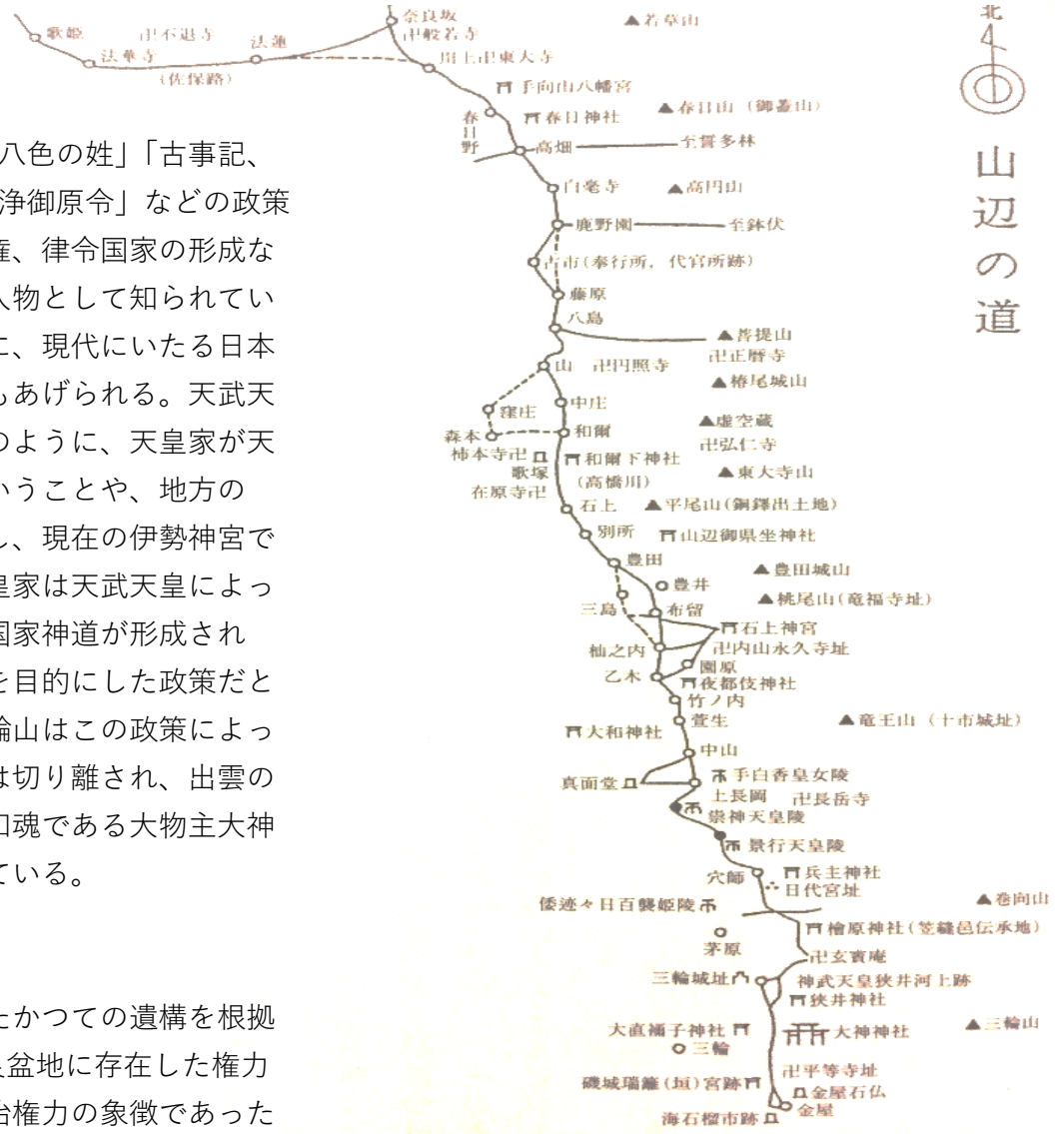


図3 山辺の道(三輪山の古代史』2003より)

上野誠、門脇禎二、千田稔、塚口義信、和田萃（2003）『三輪山の古代史』学生社
近江俊秀（2013）『古代道路の謎－奈良時代の巨大国家プロジェクト－』祥伝社
奈良県史編集委員会(1984)『奈良県史 1』名著出版
三輪山文化研究会（1997）『神奈備 大神 三輪明神』東方出版

<参考 WEB サイト>

【公式】三輪明神 大神神社（おおみわじんじゃ）<http://oomiwa.or.jp>
天武天皇 | 奈良偉人伝 | 奈良県歴史文化資源データベース「いかす・なら」
<http://www.pref.nara.jp/miryoku/ikasu-nara/ijin/tenmu/>



大神神社

今井町

いまいちょう



「戦国時代に、浄土真宗称念寺の寺内町として発達し、江戸時代になると堺と並ぶ自治特権が与えられた。豪商が軒を連ね、「大和の金は今井に七分」といわれるほどの繁栄をみせた。東西 600m、南北 300m の範囲に江戸時代以来の伝統的民家や商家が密集し、そのうちの 8 軒は重要文化財に指定されている。国の重要伝統的建造物群保存地区。」

奈良県ビジュアルビューロー なら旅ネット 今井町より



1/20000 「高田」 明治 41 年測図

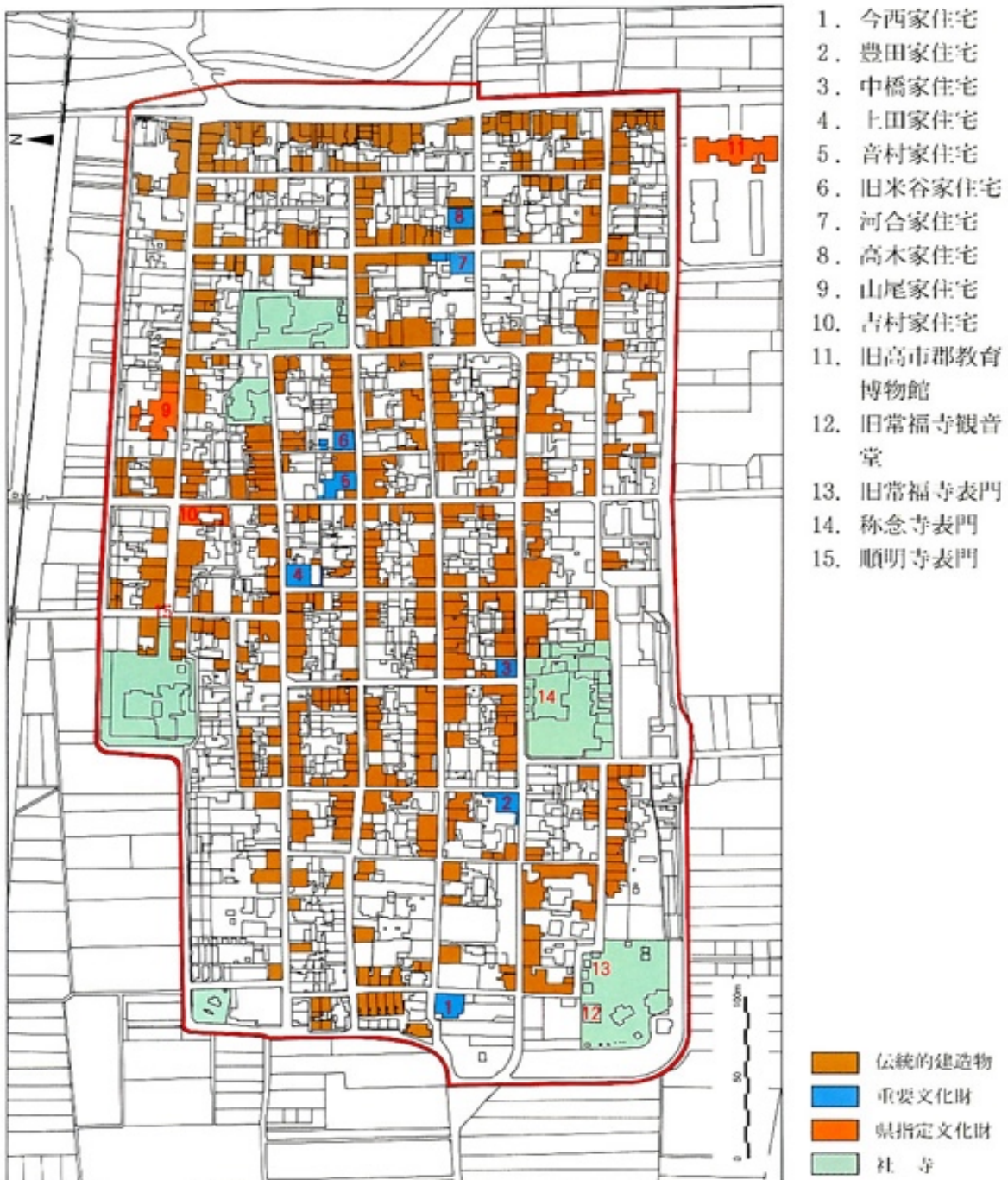


地理院タイル標準地図より

今井町の重伝建選定になぜ時間がかかったのか？

1975年の文化財保護法の改正によって全国各地に残る歴史的な集落・町並みの保存を図る伝統的建造物群保存地区の制度が発足した。重要伝統的建造物群保存地区（以下、重伝建と称す。）は、市町村からの申出を受け、その中でも日本にとって価値が高いと判断し選定されたものである。制度ができる以前から、保存活動を行っていた有松、今井、妻籠の3つの住民団体が集まって「町並み保存連盟」が1974年に結成されたが、その後、それぞれの重伝建選定の時期はかなり異なる。ここでは、今井町と妻籠宿を比較し、今井町の重伝建選定はなぜ時間がかかったのかを明らかにしていくことにする。

図 今井町重伝建地区（出典：榎原市ホームページ）



今井町は奈良県橿原市の中心部にあり、大阪・京都へのアクセスが非常に便利である。重伝建地区の中で、最も伝統的建造物の多く（6割）、民家の8割以上は江戸時代に建てられたものである。町並み保存の始まりは1956年東京大学教授による調査で、1993年に重伝建に選定された。一方、妻籠宿は長野県南木曾町にあり、アクセスは決していいとはいえない場所に位置する。中山道六十九次のうち42番目の宿場町で、交通の要衝として賑わったが、明治末期、新しい国道や鉄道が開通したことで、担っていた交通の中心が移り、妻籠は取り残されていった。町並み保存の始まりは1964年で、1975年に選定された。

両者の町並み保存活動の歴史を比較し、今井町の選定に時間がかかった理由は2つあると考えた。まず、1つは町並み保存に至る背景の違いである。今井町は都心部から近く、交通の便も良いため、現状を維持していれば、人口減少のような課題は特段なかった。なぜ保全すべきなのかを住民自身が十分に認識する前に、専門家たちが町並みを保存すべきだと主張し始めたのである。一方、妻籠宿は人口が減少し、何らかの策を検討するうち、町並みを保存するという形がとられたのである。つまり、今井町と妻籠宿を比較すると、今井町が外部の働きかけにより活動が始まったのに対し、妻籠宿は内部の宿場町を存続させたいという思いから活動が始まり、検討の結果、町並み保存が最適だと考えられたのである。

次は、行政との関わり方である。今井町の場合、そもそも住民に町並み保存に対する関心が低かったため、地元行政が住民組織と一体となって保存の意味について理解し、活動を始めるべきであった。1971年、「今井町を保存する会」が発足したにも関わらず、具体的な活動ができないまま終わってしまったのは、住民に町並み保存への関心が低い状態で、さらに行政の手助けもなかったからなのではないかと考える。行政と住民が一体となって活動し始めたのは1980年代からと、町並み保存活動が本格的に動き出すのが遅れたと考える。一方、妻籠宿は1968年には行政と共同で、家屋の修復・復原が行われており、早い段階から、行政と地元住民が一体となって活動していた。

今や、奈良の歴史的な町並みの残る町として多くのガイドブックに紹介されている。重伝建選定にはかなりの時間がかかった。妻籠宿と比較することで、その要因を考察した。町並み保存において大切なことは、行政と住民が一体となって活動を進めていくこと、そして何より住民の思いだと考える。今井町の町並み保存活動の歴史を振り返りながら、個々の文化財だけではなく、町全体の風情を味わってほしい。

<参考文献>

太田博太郎・小寺武久（1994）『妻籠 その保存と再生』

橿原市「かしはら訪問ナビ」

川崎深雪（2013）『日本の町並み 250 重要伝統的建築物群保存地区の全てを収録』株式会社山と溪谷社

公益財団法人 妻籠を愛する会「発起人インタビュー」

八甫谷邦明（2006）『今井町 廻る自治都市』

表 今井町と妻籠宿の町並み保存活動の歴史（筆者作成）

年	月	今井町	妻籠宿
1956	5	東京大学による町家調査	
1957	5	東京大学による2回目町家調査	
	6	今西家が重要文化財に指定される	
1964	2		南木曾町主要施策五箇年計画（観光）
1965	5		小野寺駿吉教授による観光予備調査
	8		小野寺駿吉教授による観光調査
1966	12		林家住宅、町の文化財に指定される
1967	2		南木曾町観光開発指針（町並み整備）
	8		太田博太郎教授による妻籠保存に関する基礎調査
1968	9		妻籠を愛する会の発足
	11		明治百年記念妻籠宿保存事業着工式
1969	11	奈良国立文化財研究所と奈良女子大学の合同調査	
1970	9	ユネスコ 京都、奈良伝統文化保存シンポジウム	
	11		愛友会（妻籠を愛する友の会）結成
1971	6		明治百年記念妻籠宿保存事業終了
	7		妻籠宿を守る住民憲章
	4	今井町を保存する会 発足	
	11	日本建築学会歴史建築、都市計画合同シンポジウム	
1972	4		林家住宅、県の文化財に指定される
1973	8		妻籠宿保存条例
1974	4	町並み保存連盟発足（今井町を保存する会、妻籠を愛する会、有松まちづくりの会）	
1975	6	第1回町並み保存連盟総会	全国町並み保存連盟と改称
		伝統的建造物群保存地区制度確立	
1976	9		重要伝統的建造物群保存地区に指定される
1977	8	文化庁と建設省の合同調査 第3次今井町調査	
	2	住民協議会 設立	
	4	第一回全国町並み保存ゼミ	
1979	6	旧細川家 取壊し	
1983	1	今井青年会 発足（活動休止 84年1月～86年2月）	
1985	5	住民協議会会長に八木幾多郎氏が着任	
1986	1	住民協議会が重伝建地区選定に向けて同意の署名活動を開始	
1987	1	今井青年会 今井塾 開講	
1988	5	住民協議会が今井町町並み保存会と改称	
1989	9	檀原市伝建地区保存条例	
1990	3	今井町町並み保存を再考する会	
1991	2	自治体が保存問題について保存会に一任することに同意	
	4	借家所有者一同が要望書を提出	
	7	再考する会が反対署名を集めてくる	
	8	第一回 今井町町並み保存協議会 開催	
1992	4	今井町町並み保存住民審議会 発足	
1993	12	重要伝統的建造物群保存地区に指定される	

宇太水分神社

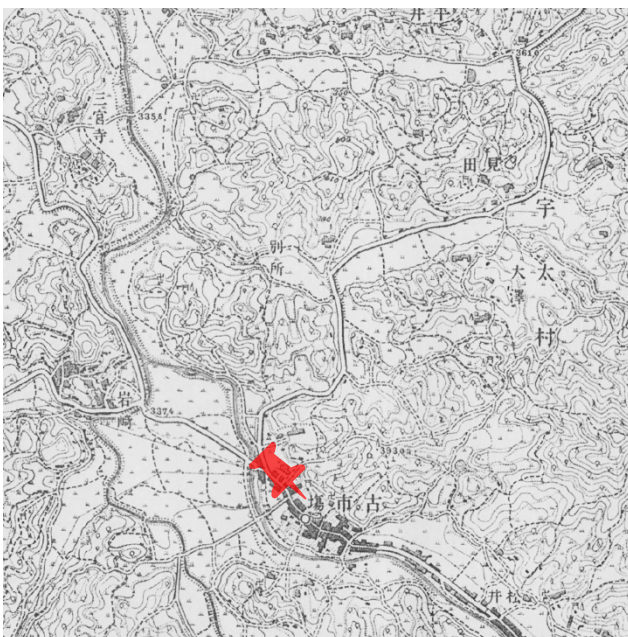
うだみくまりじんじゃ



執筆者撮影

「崇神天皇の時代に創建された古社。延喜式にも記載されており、古くから信仰を集めた。鎌倉時代に建てられた本殿(国宝)は、一間社隅木入春日造の3棟が並び立ち、速秋津比古神、天水分神、国水分神の水分三座を祀る。各棟とも大きき形ともに同じ。本殿に向かって右側に、室町中期の末社春日神社本殿(重要文化財)と室町末期の末社宗像神社本殿(重要文化財)が並んで立つ。宇陀郡の総鎮守で水の配分を司る神を祀り、葛城水分神社、吉野水分神社、都祁水分神社をあわせた4社のみが大和の式内社の水分神社とされる。神社の周囲には源頼朝が幼少の頃に苗を植えたと言われる杉が立ち並び、頼朝杉と呼ばれている。また、社殿の後には「薬の井」があり、服薬の際にその水を用いると良いとされる。」

奈良県ビジターズビューロー なら旅ネット 宇太水分神社より



1/20000「松山」明治41年測図



地理院タイル標準地図より

宇陀水分神社の秋祭りに参加する集落はどこか？

宇太水分神社では、毎年10月の第3日曜日に秋祭りが開催される。平安時代から続くこの祭りは年に一度、上社の惣社水分神社に祀られている女神の速秋津姫命（はやあきつひめのみこと）が「鳳輦神輿」に乗って6km離れた中社の宇太水分神社に祀られている男神の速秋津彦命（はやあきつひこのみこと）に逢瀬にやって来るという祭りである。祭り当日は、惣社水分神社から宇太水分神社へ毛槍・花籠・神輿太鼓などを従えてやって来る渡御とともに、菟田野の各地域から繰り出される6基の勇壮な太鼓台が秋祭りを盛り上げる。太鼓台が各地域に帰る際に、境内を練りまわる場面があり、2基や3基の太鼓台が同時に練り回る様子が見ごたえ抜群であり祭りの盛り上がりは最高潮に達する。この祭りの歴史は1200年と古いが、その中で祭りに何らかの形で参加する周辺地域（「祭祀圏」とする）は変化してきている。

宇太水分神社の社領域や祭祀圏の変化については、桜井・瀬尾編（1995）でふれられているが、具体的に地図上でその変化を示したものが図1から図3である。各集落の範囲は、「平成27年国勢調査町丁・字等別境界データ」を用いており、図の町村名町村界は1950（昭和25）年時点の旧町村名・町村界である。

中世後期の祭祀圏は図1に示している。宇陀水分神社中社の領域を中心としながら、一部宇太水分神社下社の領域まで及んでいた。中社、上社のある宇太町、宇賀志村のほか、伊那佐村、大宇陀町、室生村、内牧村、榛原町まで広域にわたる祭祀圏をもっていた。

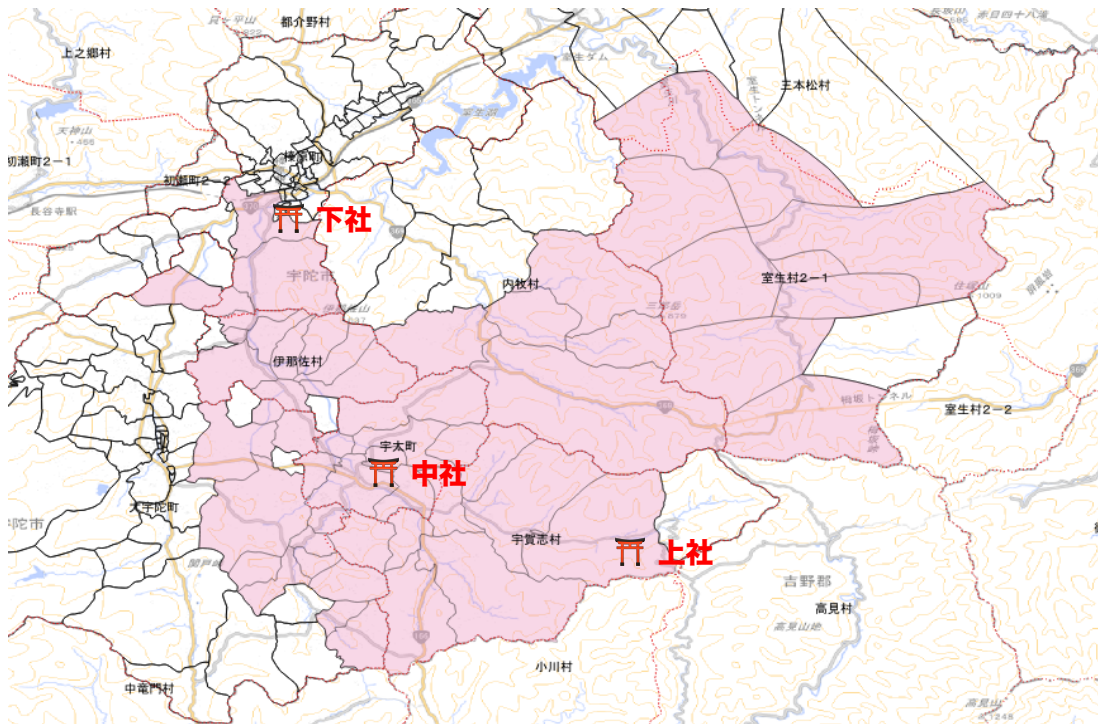


図1 中世後期の祭祀圏（1597年）

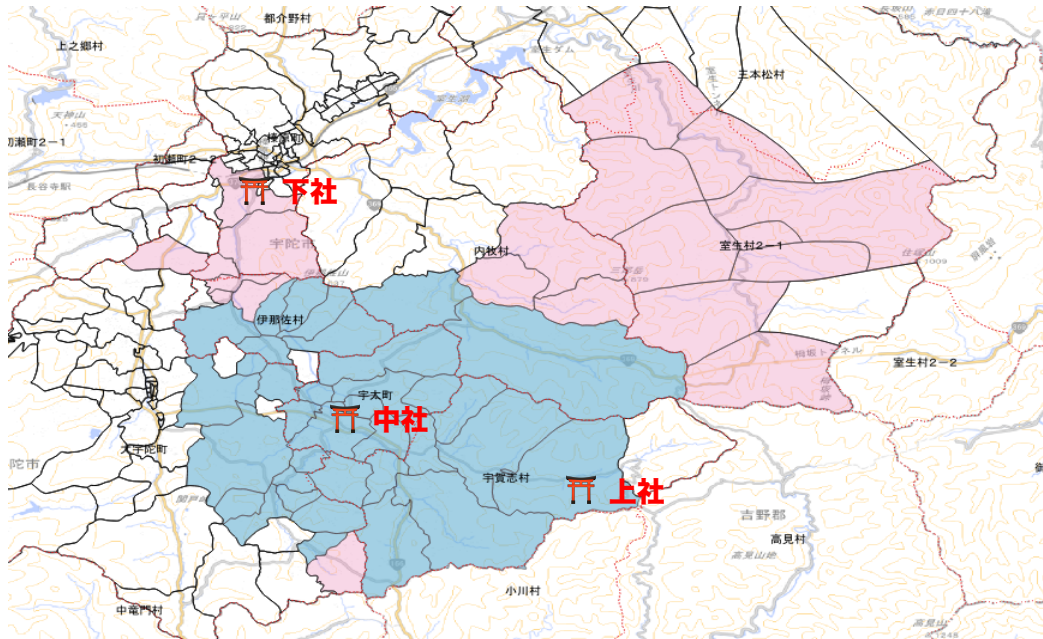


図2 江戸後期の祭祀圏 (1818~1829)

江戸後期の祭祀圏を示したものが図2である。図2ではピンク色の部分を中世後期の祭祀圏、青色の部分江戸後期の祭祀圏とし、中世後期以降不参加となった集落がピンク色の部分である。中世後期と比較すると、室生村、内牧村の一部、榛原町からも多くの集落が不参加となった。

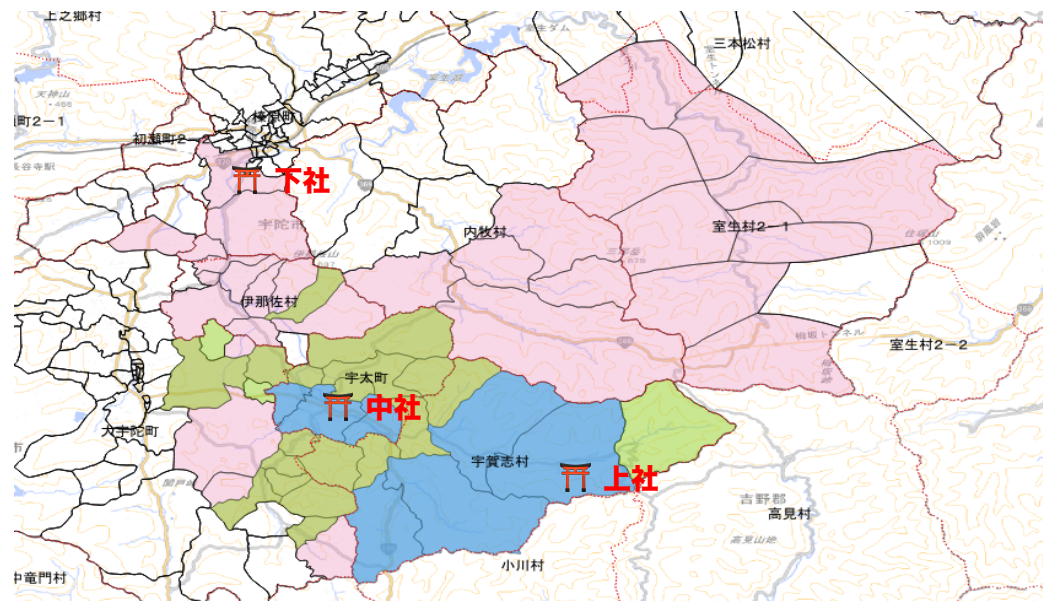


図3 平成5年(1993)の祭祀圏

平成5年の祭祀圏を図示したものが図3である。緑色と青色で示した部分が宇太水分神社の郷社の地区であり、集落から太鼓台を出している古市場、佐倉、芳野、松井、岩崎、宇賀志を青色で示した。太鼓台は秋祭りの顔ともいえるほど重要な位置づけにあり、太鼓台1基を出すにも相当な人数を要するため、緑色の部分と比較するとその関わりの度合いが高いと考えられる。江戸後期からの変化としては、伊那佐村のほとんどが祭祀圏からはずれ、大宇陀町のうち、中社から遠い位置関係にある集落がはずれ、ほぼ宇太町、宇賀志村の範囲になっている。桜井・瀬尾編(1995)では、

伊那佐村については、1954（昭和 29）年に榛原町に編入されたことをきっかけに、昭和 30 年代は
 じめから秋祭りに不参加となり、宇太水分神社との関係は途絶えたとされている。内牧村も、同時
 期に榛原町に編入されており、2 集落が祭祀圏からはずれている。市町村合併が祭祀圏の分断に影
 響を及ぼすと考えられる。

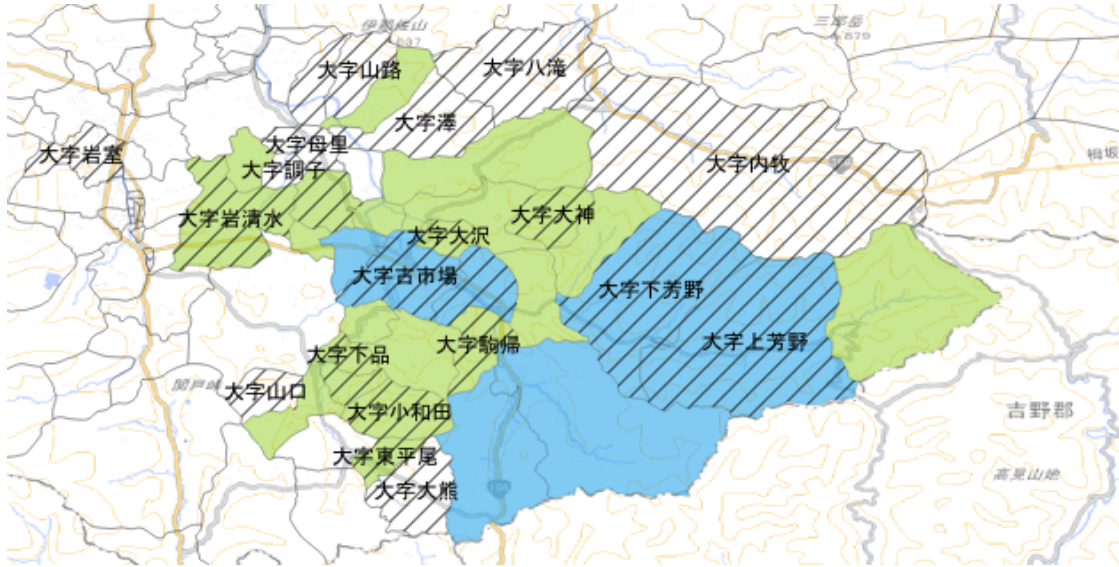


図 4 平成 5 年の祭祀圏と上水分宮の社領域

現在まで祭祀圏となっている集落の特徴をみるために、中世の中社・上社と下社の社領域（荘
 園）を示した絵図である「上下水分宮四至古絵図」（1292 年頃、宇太水分神社蔵）に示されている
 集落名を読み取り、現在の集落で該当すると考えられる箇所を図示したものが図 4 である。絵図上
 に示された集落であっても、現在、それに相当する集落が不明な箇所もあり、社領域が分断されて
 いるように見えるが、大まかな範囲は推定できる。上社・中社の社領域にあたる部分を斜線で示し
 ているが、その範囲は平成 5 年の段階の祭祀圏である部分と重なっている部分が多い。中世後期の
 祭祀圏と比較すると全体的に随分と縮小しているが、上社・中社の社領域に限定していえば、長く
 祭祀圏として維持され、宇太水分神社との関係を保ってきたと考えられる。中世に上社・中社の社
 領域であったことが、現在まで、集落と神社との関係の維持に影響を及ぼしていることは驚きであ
 る。

<参考文献>

桜井満・瀬尾満編（1995）『宇陀の祭りと伝承』桜楓社

<参考 WEB サイト>

宇太水分神社（宇陀市菟田野）<http://www1.odn.ne.jp/udanomikumari/>

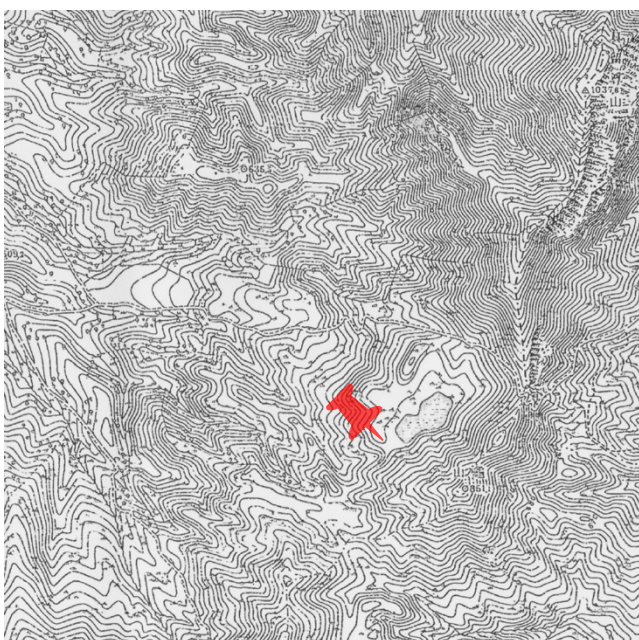
宇陀市観光サイト | 観光案内 | 社寺 | 宇太水分神社

http://www.city.uda.nara.jp/sin-kankou/guide/shrine_temple/s14.html

曾爾高原 そにこうげん



「俱留尊山のふもとに広がる広大な高原は、秋にはススキが一面を覆い、その牧歌的風景はハイカーに人気があります。」
奈良県ビクターズビューロー なら旅ネット 曾爾高原より



1/20000「御杖村」明治25年測図



地理院タイル標準地図より

曾爾高原のススキはいつから評価されるようになったのか？

曾爾高原について記述されている文献で、ススキが観光資源として取り上げられているか、1956年以降の文献の内容を確認した。

曾爾高原のススキが特記され始めたのは1971年の文献以降である。それまでは、ハイキングコースの紹介の中で曾爾高原が取り上げられていたが、ススキについては明記されてなかった。この時期には、曾爾高原のススキが現在のように見るべきものとして価値づけられていたわけではないと考えられる。では、1971年頃からススキが価値づけられたと言えるのであろうか。藤澤 a (1999) では「曾爾高原は、かつて亀山と総称し、曾爾少年自然の家の家が所在する集落の太良路の入会地であった。そのころススキは主にお亀池の山側に生えていた。手前にはススキの他、雑草、雑木があった。また、一時牧場となり、その後植林されたりもした。現在の姿になったのは、県が買い上げ、曾爾少年自然の家が開設されたからである。」とある。県の買い上げがあったこと、曾爾少年自然の家が開設されたことで現在の姿になったとされるが、曾爾少年自然の家の開設は、昭和55年(1980年)のことである。それ以前、1970年(昭和45年)に曾爾高原は室生赤目青山国定公園に指定され、観光客も増えていったという記述がある(藤澤 b1999)ことから、国定公園の指定が一つのきっかけとなって曾爾高原への関心が高まり、そこにあるススキへの関心が高まっていったのではないだろうか。その後、曾爾少年自然の家が開設されたこともあり、今のようなススキの名所となったのではないだろうか。

曾爾高原は今後歴史を刻んでいくススキの名所であろう。美しいススキの景色をよりたくさんの人に目に焼き付けていただきたい。

資料名	発行年、著者、発行者	曾爾高原に関する記述内容
峠と高原の旅	1956年、日本交通公社、日本交通公社関西支社	曾爾高原までのハイキングとしての経路、ススキに関する記載なし
登山	1959年、朋文堂	俱留尊山から曾爾高原へのハイキングコース紹介、ススキに関する記載なし
奈良の自然	1965年、小清水卓二、六月社	室生・曾爾高原ハイキングコース、ススキに関する記載なし
花の大和路	1971年、写真：田中真知郎、文：岡部伊都子、小清水卓二、朝日新聞社	秋の黄金色のススキの様子が写真とともに文の紹介も記載
アサヒカメラ 56(12)	1971年、朝日新聞出版	ススキの写真とともにススキの紹介が記載
曾爾村史	1972年、曾爾村史編集委員会	曾爾村の歴史的な記述が記載。ススキに関する詳細な記載なし
大和路をめぐる	1973年、文：山路麻芸、絵：野沢寛、春秋社	夏の曾爾高原の様子が記載、ススキの様子も写真に少量ながらも掲載
大和歴史散策	1979年、青山茂、保育社	美しいススキと記載
山と溪谷	1986年、山と溪谷社	ススキの写真とともにススキの紹介が記載
日本美術工芸	1993年、日本美術工芸社	11月の晩秋の曾爾高原のススキとともに景色の紹介が記載

<参考文献> 藤澤勝好 a(1999)『曾爾高原のススキ』国立曾爾青少年自然の家

藤澤勝好 b(1999)『曾爾の長い長い歴史』国立曾爾青少年自然の家

執筆者（奈良県立大学地域創造学部観光創造コモンズ景観マネジメント分野 2018 年度 3 回生）

月ヶ瀬梅溪・・・・・・・・植田 拓仁
依水園・・・・・・・・坪倉 美紗綺
浮見堂・・・・・・・・谷川 沙也加
平城宮跡・・・・・・・・福島 いち子
暗峠・暗越奈良街道・・寺岡 強
郡山城跡・・・・・・・・北野 正純
龍田川・・・・・・・・阿達 麗子
三輪山・・・・・・・・太田 恭平
今井町・・・・・・・・永塚 夏美
宇太水分神社・・・・・・・・尾野 妙
曾爾高原・・・・・・・・小林 太良

監修

水谷 知生[※]・井原 縁（奈良県立大学地域創造学部）

表紙は執筆者による各資源に関する写真，その他出典のない写真は※

景観マネジメント的 ならガイド

2019 年 1 月 31 日初版 4 月 15 日改訂版

編 集 奈良県立大学地域創造学部観光創造コモンズ景観マネジメント分野
2018 年度 3 回生

発 行 奈良県立大学地域創造学部観光創造コモンズ景観マネジメント分野

住 所 〒630-8258 奈良市船橋町 10 番地

